

門
1288
卷

廿人勿笑丹書杜
辛有後來方出家



醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓
醫在華林樓

大保十五年甲辰八月清船護送本州漂民
初太郎至長崎於是臣齋藤惟裕奉命以之

歸至則召之使侍臣問流離之狀民因盡說
其所歷風土人物。太公乃命儒負臣前川

文錄之小臣酒井貞輝實助其事。圖則画史
臣守住定繼任之書成賜題曰亞墨新話使

儒負臣那波希顏序之。謹案。民所飄至之亞

墨利加洲者距我

日本數萬里。舟車不通。書不同。文地志所載亦不能詳。想遐陬蠻夷。其人未必知聖人之教而民之至也。有憐其流離而養之。且欲分財使成產者。有傷其懷父母之切而為之周旋。便得歸養者。亦可以見普天之下。率土之濱。斯民乘彝之性。不期而同矣。我 太公憂

一夫不獲之心。已喜民之生還。又以為其言雖鄙野。皆出發涉寓目之餘。比之耳食之書。荒唐無當者。則有間。不可不紀。是所以使文錄之歟。若夫民之方飄蕩鯨海。轉徙夷境也。自期為異域之鬼。寧知一旦出萬死。歸故鄉。身抵公庭。仰瞻巍之翳。荒之語。辱賜採錄哉。何其多幸也。否之上九曰。先否後喜。漂民

之謂也。

天保甲辰十月

儒負臣 那波希顏 謹識

天保十二年辛丑の冬、我が板野郡撫養高野
村の民市太郎の子初太郎とよしの携州兵庫
高船の水子と名乗る奥州南部に赴き、
途中難風は逆多吹流とせ東南に向ふ
百二十日けう洋中を漂心後、西洋の舟に
助らば又東に引去と二十日おし、北西墨
利^{リカ}加の地あり、爲る事二百餘日便船を

得る唐土廣東の澳門に渡り轉て寧
波に架右浦に到り癸卯の冬終て去り
復送せられ今茲甲辰の秋使臣高蘇
寬偲に従ふ所より歸者八月二十日城に
至るに侍臣漂流の消息を詢問し公聽し
侍せし後天命を蒙りて其始末を書記し
乙卯の首を備へ既し長崎傳書に記し

間の口供あり又寛作ら舟中より録せし
説の二冊あり此二冊を奉りて其文より
初太郎の燕居の語を聞き其詳形取
るを得し源井順徳より其稿を記し其
文の意を深き一冊を成せり其
地形里程の如きは初太郎の親歴する
確據とさるるに是る如くとも原末

學識も如き舟子の流離顛沛の間は何
架る僅るを見記統せしむるの如きは
争てり強強無さるるを得ん固くこれを
地経因説を考つて又小出長十郎が如く経緯
度数の説よるるを其仇の意なきとてしぬ
未だ其節を知らず其に法風俗も其
詳ゆるを地一且地書の載る所をも採

新しき如く一時の侯柄とす間く本録と
同書何より蓋初を即が見る所を唯そを
隅よ止ま察諸書の載る所を其合州を
備すれを如所専ら其味の趣を易きを
ことし其教め其の事書を弄す
其の如く其文義の拙きを容し其唯其
事の新奇なるを考し其如く其ことを

仰々々云爾

天保十五年甲辰の秋九月

及又漢多識可

漂流海路畧圖并經歷地方經緯度數

日本下總國犬坊

北極出地三十六度四十分
瑪撒充蘭東里差百十三度廿二分
廣東西里差二十七度六十分

北亞墨利加瑪撒充蘭

北極出地二十二度
伐訶西里差九十二度三十二分
廣東西里差百四十一度

珊徒意私伐訶

北極出地二十度七十分
廣東西里差八十八度六十分

右三所據與地全圖

清國廣東

北極出地二十三度十七分

鳥道

大坊ヨリマサトラニエ

弧度九十四度十九分

鳥道二千五百七十六里

但度間六十間一町
三十六町一里

マサトラニヨリワホニエ

弧度四十八度五十分

鳥道千三百七十六里半

北亞墨利加

ワホニヨリ廣東ニ

弧度八十度八十六分

鳥道二千二百一十一里半

廣東ヨリ大坊ニ

弧度七十七度三十一分
鳥道七百四十七里

廣東ヨリマサトラニエ

弧度百二十一度

鳥道三千三百〇九里

但此弧度ハ松前嶺北極出地
四十二度六十九分、地ヲ北

マサトラニヨリワホニエ
廣東ニ至ル

鳥道三千五百三十八里

マサトラニヨリ大坊ヲ経テ
廣東ニ至ル

鳥道三千三百廿三里

小出長十郎 推算
北野申岐太 校合
酒井順藏 圖



初年此所ヨリ
舟ヲ上旬使
舟ヨリ廣東ニ渡ル
宣化月中旬ノ大ハ文船
所ニ破ラレテ初年
七人ノ濱ニ上ル

宣化月中旬ノ大ハ
三舟ニ破レテ
トニ此ノ大ハ

圖伯特

北 東 南 西
赤道線

画墨形活の書將日半成らんとき、此年中の曲折画圖を非
 せしむ事一かゝるまゝの何れととも像一人なり故をそのまゝを描んと
 するのよ、地形物状多々様は毛筆で想創らざる所ありは然
 として筆を下に由り因り初を命を指さる小親
 灸よするの自餘詳しき説を礎糸を要め土を堤ひて山
 川器柳の形状を摸し人物草木は五倍は十倍を添へて形を
 起し器物色を解き是より其肖する所を印し扇政曆
 換て般十進子とよの舟楫帆樯の製法の如き本を刻
 紙と書其小様を造り細線を繋ぎて芝を進退しそ流流の
 趣を命たりし前後小写の次一圖由形を在撰を切つて是
 願肩小似るゝゝも、君命を教し是信を後世に傳ふ人々欲され
 たり或ハ鬼魅を画の類とすも、そ其要部を物に擬せしむる
 こと蓋しや也

臣定輝謹書

初漂流をりしより更墨利加よりり廿二おせよ
 留とくまの活

天保十二年丑の秋八月兵庫西高月町中村御伊勢
 船永住丸少々の子此等積少十八端杭ありは地所積
 係香葉豆并二糧米十五俵を積込余伊勢人歎よハ

仲船頭 他州目佐須 善 助
 岡廻り 阿波 初太郎

初太郎元

七太郎

伊之助

利三郎

萬藏

要藏

之兵衛

岩之場

友次郎

伊録

能登

伊豆

奥州南部

目

播州 明石 赤松水

能宅

目

惣助

九州

多吉

紀州

孫一郎

以上十三人 同日廿五日 兵庫出帆 九月十日

相模國浦賀の湊へ着き 公の御政を受て舟同座役

塚本右兵衛 某定七十俵 舟揚り 翌十日 晴天

浦賀より出帆 奥州南部へ志し 翌日 在風出

勢 故奥州の方 某定 同日廿五日 又個代の湊へ

入船一十月廿一日所出船房徳の沖を安んずる
十月廿二日下徳の國大棒岬の沖を過るる地を離るる
五言重なる所所より奥の海へ幸あらしむる沖合風
早やうに兎角一海洋中を漂ひ舟より一子別は
其の別をいふと北より西の風烈しく吹來り波浪
殊更盛なる故帆をちりて暫くの遠くひと子別は
よそ家子寸ひかりとなりて荷物をおく海中へ投
捨翌十三日よりのても風波猛烈一子故又く荷物

獲る十四日の夜に働きし船もとあり凌むる是れ
を合読合してさあつ凌むる方此をを書し神國シナ
とく同は初急一たり是を西一子帆柱を切お
唐の神龜を西首をなすもの則介を捨て櫓は
上へ登り是をちりて一分をうりもおぬるに
風波の存に物撞するにうに櫓忽ちおまき海にぬ
まより袖の方へ礎を二程下けたまき芥潤に船を付く
ゆりめ舟のなき流るるを路を又取料料七七等あるに

潮米を俵さうり揃うしこれに夜より十二人の食料を
米を^卯粥とて食し唯神の助けを祈るなり
論すしと極あり十九日朝に刻をうらいたる風^{ナギ}吹
谷あり力をたてしうし子刻をり又辰巳の風り
あしうも夜^亥の刻よあたまわく烈しく吹き面は
ちの^陰障まり翌廿日の曉卯刻より又西北風を食
味つよくなる卯辰の方漂ひ流る丸始て吹拂り外
時より既ち地方の心もんもそおくる心痛なる
小物なり十一月七八日はまた同く風流る味流る此
時より卯の時の食料もさまたる同十日は又舟に
舟の艦破砕し一戸を動かす海の中は漏れ極み破
十音は舟の舳の方破れしうの端船を解けしり是を
控^控て七艘も一船も逃くよ切丁二挺作り六船も一
舟船もつ船の舟うら船あり一は船二船は舟
又飯料を食ししうら後を控ぬし酒は控
などせありしう食し雨のさぬちんを春水も及

正極南を境を食せず故に氣力乏しく以て長く干
るは偏き故に一而神佛を祀るの外唯一方位を勘
斗の卯辰の方(尤も己子の方)を一向に流る船は
是れ亦るの如く始終西の風烈しあり既に其年
若く明立し當年の春とすうぬたあく風の如く日
あはれも甚くなる大洋の月雲と浪とを見ても
海は似しもの如く船は似しもの如く静
静ある時は尤も帆を徳徳子針を曲し廉の角にひ

松の本は茂るありて餌は似し形を仰ぐ辨九万舟の
類を釣くしきを食を潮のまの如くまじくあまじく
那ののふて如く船は似しもの如く静
たるる如く船は似しもの如く静
東の端れを吹拂されまじく卯辰の方を以て流る
を認めし所は冷しきこと事ハ必しもあるべし
二月の良き日海靜し如く船を多く泊貯へて
食料を東南の風を以て船を角にして帆を地り

二十日午の午後三時ついでて再之義舟のついでと
減りやうとすまふ事移りたりしぬる机暴子
津浦入と忠方一丸を何をいふ公法通せされど
只一月の事と合せぬと舟より移りたる所
船りたる事をききし事。津浦を船も船を指さし
来りし食事をも其れんとし移りし合を教へ又船中に
ありし酒半樽は糖十七樽并に鍋釜竈もとも指し
少くも船へ積取しし事をいふ余も此ついでに力

船りしついでに僅し命をつなく形とたる酒半樽をさし
奪りてハ所詮^冷交船中居りし事もいふ
思ひ是非が皆く衣類の道具を二つつけ^遠行
衣類を毒を被船へ乗移りたりしやう并に酒の樽
は、^湯を菜の塩漬とを封じしめて各小共へて食せし
扱も此の百日後は向も穀粒を足る事とすし
ゆても海ごらめはつらも飯のたをの愛も足る
船中は老とも公船夕は此中をいひ衣をこし

あせ食らば死しても畏ある海を云はしむるは
とあつすもいふは胸けられて一柄りの版を食ひたつ時
其味の香かり一車はとふる物ゆ一振あつてそそ舟
をいれハ破れ持たるを目もあらんおろくも今迄も
あつ船よきてらう一あつ今を碎け沈むおんと
いふもさうさしはふも風を待て船子里の道を
をり再び日かへ向らんあつとひたるまゝとそそ舟
渡り思はれぬ扱ひ助けふまゝ船は河古の船や

知れざりしが塙は聞けハ伊西把作重の舟をじし
とそ凡十二間斗帆柱式本浮帆柱と帆数中ラ斗
あつとそ橋舟之艘はる船中の形替大橋並船と
日一乗りて乗個人数掛ハ人船改め老ゆハ伊
西把作重の老ゆり眼中赤く髪も白も人さあつ
其降の舟子ハ皆瑪泥爾利の老のそ一少一服晴も
日ハ今と同格ゆり髪も思ふまゝゆり供此舟以て
より六十日斗の習をあら向れ帆ゆり初めあは

瑪泥爾利ハ
呂宋の船を
即ち松崎の
惣考なり
本敷え船を
舟とす伊西
把作重ハ
と稱せり

の程にふつ々食事をさせ一かともき塔に成して
 と一船と艦ナヒ少く十人をも二夕但しおち船中の法
 用は使ふ二時さうよ交番して昼夜間おち
 と法法云をたて敷酷ぢうぢう少くも急る時に得を振也
 して河をすそ念たれとゆすづき極おし十日
 過てより船中おち一とちおちさうぢうぢう
 春の日和ふに一滴も涙さず咽おしとちおち苦しみ
 船を弱くしと漂流せしるるを志しと上陸をせ

おしも食せしめされい後よりおち力盡へしと極
 死の事もある候にわづらひとちおちとちおち
 帆柱のしりぬれをせよおしと命一とちおちも目おちた極の
 働せしめたるおちと極とちおちとちおちとちおち
 船は許されしと一二男とちおちおちも目おちた極
 と極おちた船をちおちとちおちひおちとちおち
 体の人とすれおちおちて身おちうてたま持おてつ
 出しおち擲しとちおちつとちおちの如く苦しみとち

と放初の助けらるる所の事人忘れては眼めく
のころは舟くうあ十日計は舟うて皆つ日は整を
切て海は流しぬびる舟の約をよる所はき
一晝夜は百七十里進む日といも百里内外をきう
たうとそむ又舟底は羽すく色なる板や魚あど付
といふとも船くたて十日むくうすあは四月中旬と
思ひ或日此舟の初えうりふたの方の國のころあ近付
るう別旋をいふまゝ地方よりこの田丁をうり中よあ

きり此舟の流すや行りあ下程上ハ山あてか
きり船人を橋あや度よより買物あとするは
障も人もあうて船人といふかをすも極すのふ人由
相も夜の刻始善助初を即海に即多善利を席
伊の助惣助七人の若き橋あはきり上陸す一との
事あれとも船中といひ船は安内も志ぬ因の事
故あまのあまの船人たの憤りも助を舟擲あ
しつて僅役あるも故あまのあまの船あに接り

浪をよき清けいし時をよき際よきしとて櫓をあげて
あけておしき影をぬきて故を忠懐して急ぎ
陸へ進上れに櫓あはき浪清返すと形て本船の
破せよと想うすし直に帆をあげていの方志らす故に
ゆるゆる人の業浪色を荒れしとて舟たじり物事
差助中板今日旋を卸せし時陸の方へ送り
白壁造りの人家はるを戸をひらきしりも一とてまよ
よそ聲のゆき舟の止るるを教むしと有るを人の

考のらまは是とて急ぎもぬき急をば使ひ若し
めし舟人の心は引競入んば此浪はらる人もあは
邪人の心を持し急ぎもむ其上の人の急私人と陸の者と
何やらん心をも清らひたる櫓子ぬれい定く悪き巧
をぬき急をば使ひ急をば陸の人の教せん
よのゆきやしりぐさやう形はようあつし舟りて
漸く助かりたる急をば又失くすや唯此浪は夜
をぬき急をば使ひ急をば去地の櫓子物の有る急をも

能く寂寂の思ひとてとて免も節を好ましく去りて
菊里の波濤は漂ひぬる遠き邦國に成て衣倉の
縁より離れ去るぬ浪をよと捨られし年六所経ぬる
くも命をとりぬるやとて皆大勢を何れかて泣長
くもあ人又中極たるとい難せんよの巧いもいふかぬ
國中何方より進出するや今暫と語れしりとも
明日の必殺とて一連も逃れぬ念なき一一夜也定
たりとも何れか邦より思方^後ありて心を苦くぬるにあり
殺されたるまゝはありぬあはくも是れ君子に成し
るや邦國の人を思ひて其^釋羊を労きし体ありは
早しと連中來し命しありあはくも再び帰るる時^家あり
の害を知られたりとわらひ各受悟りて一と釣糸を引
ふれ目撃ありとてわらふと三打汁ありふ人殺
のさやもあはくもあはくもあはくもあはくもあはくも
同じくあはくもあはくもあはくもあはくもあはくもあはくも
あはくもあはくもあはくもあはくもあはくもあはくもあはくも

舟
西
北
尾
五
舟
也



伊西船匠画
画田墨利如子
字多子图



人家の形作る。西ヤリとも即西カ廣なるはゆめいとのた
きつゝひたるよふに阿蘇池人の地なる様を為すなる。

今をる集り長よりはつゝ一尋ふたりきつゝ何れも
は舟通きこれに漂流艱苦の者も多しといふ
より知りせまはは必死に思ふてえちめおめと二好
つ眼に何れの命もやと仕舞つゝるもひもあひ即
日本と再なるも^{かたむねに志とてんして}八ッボこせ
いして合志しけるゆへに又よ五人の者の演違わ

林の邊より一とよ真似て志つる勢も彼の地より
急いでいそぎの男討流て又流急へ入りても一連
舟の所し立ゆつゝもやうとそ急の大樹のもとに半の波
を二枚きりて七人を一町よけさへむ松原となりて
二三人の人何やら人用事らへも幾人ももてい
はめらる放するや教へに其の形も今もいふゆゑ
夏より目やあつらんと思らへて志づゝ七海と詠む
事能はず
後よりすけいなるに船を多く言はせりて故も書と
するゆゑ船中も船が七人といふ事なり其故

田中向なる日本の七月に乃宋候して其年
治一志を以て蚊にむてあり既よき夜も清涼なりけり
二朝の夜は婦人三人出たり七人の老を以て各其の
家より出たりていさよといふ事ありきその中砂糖を
入するをきくして一隙にめりて梅とて四人と出づり
川にけて家の内より入す朝よりいさよといふ事ありて其
の如きといふあり日や夜も是れより下は牛のはとありて
食事をとすも唐黍の飯とては漢中たる獸肉と芭蕉の

實ありとも食いせり芭蕉の笑はさく熱いなり 此二朝の家

去朝の土を造りて登の原より斗長といふ間
行間をたてて斗東向し戸をききあけて包根ハ
芝カヤギキを造りて芝の形を蕭々似て長き文幅を寺に
たすより床の上より更紗木綿の蒲をぬきおきて
登殿におよ建ちて電ハ去りて泥り後の端又ハ地場の
如きものありて若くはす一朝ハ振建よりて登をにつけ
家根ハ同様ありてあま合して此一人勝居位す人物

も多白く髪黒く眼のまも日本は同一徳を施す
の月よ再なること覚へる其時人々西洋内海の人物
は亦アメリカ洲のカルホニアの内カボサニ方といふ
山下の渚邊に狭き所と見え二軒とも板席年の
新を多く取りおき人家多き所へ高し後世より
作りて敷多園を設くその中へ堀ひきこみ此所は
二日あり一うそ同様の茶を砂糖をいせて飲食す
たまに晩とあつた食す二日目はあつて遊覧積斗

の船の船内を捕りぬると腹の油を樽樽入れ七人の若
きも其よりおせしむ何方へ道へしと仰きし此船は
底の洞より包より腹の所も西洋船とありと仰き
柱を建てる船より人を見たり此船は東より西へ
走りて二日目の巳刻より三ツの渚邊へ着きし此も又
十里斗と仰きしと覚ゆたの方へ地續り外は海あり
連りて人もたて渚邊へ鞍馬十二と定奉りし此所の
人物のふよ同じく馬鞍も日おきしと仰きし
但鞍は
白馬也

張の合抄
 を付さう 各馬はなまられ口分を今く 付添ぬゆゆり馬の
 尻をなまられと考も下り又船頭をなまらぬゆゆり
 附添て北のきやく初め或初なまらぬゆゆり一人
 内取より来たるはなまらぬゆゆり馬はなまらぬゆゆり
 好く大なるまらぬゆゆり事なまらぬゆゆり告げぬゆゆりなど
 權をせしぬゆゆり十七八のゆゆり人なまらぬゆゆり
 なるゆゆりなまらぬゆゆりカキルなまらぬゆゆり内サマをなまらぬゆゆり
 墨利が洲の内メヒコとゆゆり部のなまらぬゆゆり地へ寄つぬゆゆりの
 なまらぬゆゆりなまらぬゆゆり人なまらぬゆゆり故別馬なまらぬゆゆり
 合抄をなまらぬゆゆり側をなまらぬゆゆり以前の墨利が洲をなまらぬゆゆり
 七た市万花なまらぬゆゆりなまらぬゆゆり大なるなまらぬゆゆり
 れぬゆゆりなまらぬゆゆり子孫彼船此後なまらぬゆゆり水を汲むゆゆり
 きたるぬゆゆりなまらぬゆゆりなまらぬゆゆり捨て何西もぬゆゆり
 ぬゆゆりぬゆゆりなまらぬゆゆりなまらぬゆゆりなまらぬゆゆり
 ぬゆゆりの始末なまらぬゆゆり船中なまらぬゆゆり四人のゆゆりなまらぬゆゆり
 ぬゆゆり内又野人舟の若世人斗なまらぬゆゆり九人の若人をなまらぬゆゆり

思ひよ運河の中も初を即き人作り持て年
齡千載斗よと申人よと人作りて運河と
するは世交のよ人の業と云く婦人又の業婦と云
おちよか何ら家子よと云く子極るを太の
人よと云く替く事ひい分逐よあの人を理子初を席を
伴ひて去り半程のよと云く家よと云くし家の体と
見よれ長よと云く幅よと云く斗堀建造よと云く句壁
を子初根の草昔よと云く家内い男女十人位すや女八

下男老人あり家の内におく土間をて谷まき人の此
床を居よと云く床ををぬらう人初初めの所
月よと云く髪よと云く男女とも奇廉なる方よ衣服
食よと云く初よと云く唐米よと云く麩肉を糶よと云く
時ハ茶よと云く糖をよと云く餅よと云くを食す
餅は小麦の粉を糶
卵やて餅カステイラ
餅は小麦の
田よと云くも儀と云く男子のよと云く牛の皮よと云く
用よと云く板よと云く初よと云く暑よと云くけよと云く地焼る
よと云く皮よと云くすよと云く表ハ麻羊の皮を用よと云く地焼

出地中のみならず、あるは果ては東洋の諸島にまで
驚くほどの程なれど、道二丁斗を以て読するに、
志すれども、已に刻以て、海風南方より吹来る人
のやうに、暖易き一、實に造化の自然と云ふべし
又男女とも、白の目より、淡門に在りて、水は浴する事も
膚を人より見せす、女の猶、髪は赤く、世に在る物を、
娘は夫人の若き、髪をせし、清の風が、ゆる衣服も、夫人の
染とおぼし、初を廊う、衣箱せし、家のまは、衣を、
キヨウサと云ふ、
上つて、
キヨウサの苗字なり、
書あの名を

イナ、言として、男と女、男子の女、スラス長女に
ア、トウ、ヤ、次女を、センシ、末女を、ハ、ス、初男を、ア、ス、
い、お、も、い、つ、お、因、縁、也、有らむ、シ、ケリ、キヨウサ、初、衣、
様、を、ひ、る、大、方、な、す、衣、服、を、も、皆、新、う、く、
衣、箱、を、め、い、つ、初、め、其、衣、服、を、着、所、出、一、日、の、
い、ま、た、る、時、に、各、各、の、衣、箱、を、取、り、
人、と、同、一、く、衣、箱、を、加、へ、り、
婦、人、を、
キヨウサの苗字なり、
書あの名を

一も入ぬき出らぬせられりやといふは、
あつゝの事おゝあま
著一々の回を平すは、
つよつて薪を採りて田を耕す時、
又ハ水を汲むを採りて、
暇の時九人を集めて故郷の事を
のりて、
志まらぬ物を、
アメリカの信を教へんとす。

印國の旗を差して何れせんといふ、
言語をせん、
あつゝの事おゝあま
横文字の、
事終つて、
家、
かゝるの、
必使ひぬ。

カリホルニアと
日本の車道とい
るまで方りの遠
なれハを夜に
反するといふ
かゝるものも
ハ亜墨利加と日本
との相体の仕
形をみては
いふ事ある

物さ年々少く思ふに一
とくは年々少く思ふに一
事ハありト云ふ又
少く物をおよび一
日本よりハ解相体
世地の相なり相
海を分け月海の方
アリタカリホルニ
其間の子城四半日
城を

地味便安の道
を道せば内より
外ハ越しては異日
路といふははは
ハ極道の事
サシ別の岬より
アトアの方ハ越
るは道より
後よりなるや

道ハ山路除也人
相色四月半旬
歴て是物
此人
人馬食物
又ハ五十日
伊之利
人少く他
一

やあ... 船七を水万を海七を多きのおい
はるかにおせに當り... まう... 四十日...
に成て... 家... 公用... して... こと...
所... 城... 書籍... 中...
急... 彼地... して... 女子... 徳... 初...
以... 妻... 子... 告... 求...
乙... 入... 方... 西...
も... 地球... 地... 海...
余... 此... 海...
を... 口... 容... 海...
一... 初... 妻...
一... 月...
一... 此... 内...
夕... 雷... 日... 度... 風...
利... 船...

は... 世...
八...
と...
の...
お...
甲...
一...
と...
は...
の...
夕...
利...
の...
船...

余... 此... 海...
を... 口... 容... 海...
一... 初... 妻...
一... 月...
一... 此... 内...
夕... 雷... 日... 度... 風...
利... 船...

二ヶリ午白サゲ居
宅の事

長り五間身好之筒杓
 扇根の着扇よ似たる蒼
 苔を本交斗ある板二十枚
 斗つて半は本板ありて
 羊子上より又本を
 上中去りて本板は板を
 蒼を以て打てし
 而方へは此井より
 桿へあるなり
 頼の地建よりて上ハ
 二版ありて本を
 板を以て建を

内物も石灰
塗あり



外庭の焚燒をある所あり
 園ひの度より此處とよとのを
 新鮮植中 かしら色
 家の後方の一亩ふ庭あり此ことこののうすを後をせし
 夏よの儘言ふりて身より此道ありてのりよ門庭あり
 内子馬をつねく場あり

同く肉の扱形

中央の向うに大サと子
 合つて居る所の意あり
 葛の上ろふは惜
 意あり葛も
 有べきは
 せうけそよに
 白き西洋布
 故あり
 側へ並べた子
 欄あり

物事の二階有皮
 着る衣被を入り
 又後道共を上げをかり
 陽の影をうけはるは
 階座を敷き入るは
 上へも作をかけ杖を
 下にえりさあゆと



言語

亞墨利加の言語六種あり 星是可は用もるを星是可
 語と以し字露も用もるを字露と以し伯刺西兒も
 用もるを步弼韻些語と加刺昔印も用もるを加兒奇
 些語も以上の四種ハ甚と古とし傳へる語なり
 今も羅甸語都逸語の二種あり是ハ改羅巴も傳へる
 不おろとく初を昂り冊サ忽ホ刷ヒの古人も傳へる改
 羅巴語の精訛轉せるもの形なり古人の初を昂り又教て

謂るは撒私得墨利加と亞細亞の瑪泥尔刺と歐羅巴
 の伊西把你亞波^{トル}尔杜瓦私此四所ハ言俗お^色すといふ
 とり果して物もや言やを^色かす今大畧をたの舉
 る後東の考据一^色備ふ

天文

日ソラニ 月トヲナ 星イシエトヤ 雲ヌバ
 雨ズル 雨降^{アツク}ズル 雪子トハエ 風ブト^トト
 烟ウモ 寒ッリ^クウ 熱^カカ^ル 天気^テニホ

晴雨何如ヲホイノコソ

時令

正月 ^イ ノ ^コ ヨ	二月 ^ハ ノ ^レ ロ	三月 ^ミ ノ ^ル ソ	四月 ^シ ノ ^ハ ニ
五月 ^イ ノ ^ツ ヨ	六月 ^ム ノ ^シ ウ	七月 ^シ ノ ^リ ウ	八月 ^ハ ノ ^ツ スト
九月 ^ク ノ ^シ ウ	十月 ^ト ノ ^シ ウ	十一月 ^イ ノ ^シ ウ	十二月 ^ニ ノ ^シ ウ
歳 ^ア ニ ^コ ト	幾年 ^ク ノ ^ト ト	幾日 ^ク ノ ^ト ト	今日 ^コ ノ ^ト ト
今夜 ^コ ノ ^ト ト	明日 ^ア ノ ^ト ト	明後日 ^ア ノ ^ト ト	昨夜 ^ア ノ ^ト ト
前夜 ^ア ノ ^ト ト	昨日 ^ア ノ ^ト ト	前日 ^ア ノ ^ト ト	

地理

地 チ

少 シウ

川 カハ

濱 ハマ

島 シマ

奥 ウチ

街衢 カキ

石 イシ

畠 ハタ

潮 ウシ

火 ヒ

水 ミヅ

山中 サンチュウ

塵埃 チンアイ

人倫

国王 クワン

母 ボ

兄弟 ケイテイ

兄弟 ケイテイ

相公 サウクウ

夫人 フジン

少婦 シウフ

男 オトコ

女 メ

兒童 コウジウ

我兒 ワガコ

婢 ヒメ

官吏 カニ

人 ヒト

宰官 サイカン

鏡卒 キョウソウ

工匠 カウ

船頭 フナトウ

副船頭 フツフナトウ

舵公 カウ

炊者 クシヤ

老人 ロウジン

美人 メイジン

小生 コウセイ

足下 ソコ

汝 ニ

病人 ビョウジン

頼應人 ライオウジン

爛醉人 ランサイジン

貧人 ヒンジン

破落 ハラク

長大人 チウダイジン

肥大人 ヒタイジン

瘦人 シウジン

痴人 チジン

聰明 メイメイ

朋友 トウバウ

聾者 ソルト

盜賊 ラゲマン
ヒラマン

女夫 アガコエテ

身體

頭 カヘリ

髮 カヘイコ

眉 ノズレ

眼 マホシ

鼻 ナシ

口 ボカ

舌 シタ

齒 シヤ

耳 ミミ

顔 カヲ

鬚 ハゲ

剃鬚 ハゲコル

手背 テノ

指 サシ

肘 コブテ

足 タビ

膝 ヒザ

腹 ハラ

尻 シラシ

腫物 ガラク

血 チ

頭垢 カマカヲ

心病 シヤク

乳 チチ

男陰 オチウ

女陰 メカ

小便 シヤト

大便 カク

動作

步行 ハカシ

走 コシ

徐々 ボク

着 キ

往 イキ

返 カヘル

沈思 シヤム

呼喚 ヤウ

疲倦 カサト

囁語 ソソメル

喜往 コシト 疼痛 イシ

制 アムラ

頑要 ツカカル

好愛 ケル

好性情 コウジヤウ

食 クハル

飲 ノボル

空腹 アブシ

戲舞 ウタエ

截断 コルタル

棄擲 スラル

寐 ドコル

眠 ドコル

起ル 子ビシタ 敲 ベガル 観 ハ ベル 聴 ラ ク

動作 カバレル 收拾 ワケル 交易 カビマ 賣 マ ケル

買 コ ケル 怒 ハ ト 泣 ヨ ル 歌 カ ケル

裁縫 シタマ ズ ル 婚 カ サ ル 相親 ス ヒ マ ス 習字 マ シ ケル

写字 イ シ ル ベ ル 釣魚 ツ カ ド ル 踏坐 フ シ タ ル 死 シ ム ク

洗 ハ ル 交媾 チ カ ル

言辭

見テ ラ ズ ル 夜 語 目 日 ホ イ ク ジ イ ヤ ス ト
朝至 午 日 ハ ア イ サ ウ 猶 好 日 子 ヨ ロ イ 日
朝ヨ リ 益 マ テ 猶 好 日 子 ヨ ロ イ 日
自午 至 猶 好 日 子 ヨ ロ イ 日 夜 則 日 ホ イ ク ジ イ ヤ ス ト
晚日 ホ イ ク ジ イ ヤ ス ト 猶 好 日 子 ヨ ロ イ 日 夜 色

間起居語 コト カ シ 懇敬則 カ シ テ ス 好来 ハ シ テ 請進來 イ ダ シ

請坐 セ シ タ 多謝 ガ ラ シ マ 又謝款待 オ シ マ シ テ ウ ラ シ マ シ セ ウ

不好意息 ホ ク シ テ シ 請恕 コ ス マ シ マ 請恕罪 コ ス マ シ マ シ セ ウ

大家 ド ウ ク 多々致意 オ シ マ シ テ ウ ラ シ マ シ セ ウ 拵態 シ マ シ テ ウ ラ シ マ シ セ ウ

告别辭 ア リ マ ス 請慢 イ シ マ ラ 請借火 ツ ク シ マ シ テ ウ ラ シ マ シ セ ウ 少時来 シ ウ シ マ シ テ ウ ラ シ マ シ セ ウ

那里去 テ リ マ ス 今将往 イ マ ボ ラ イ 尚重来 オ シ マ シ テ ウ ラ シ マ シ セ ウ 不要 イ ク エ リ

乞物辭 ダ マ 其物辭 シ マ 呼辭 ハ ナ シ 應辭 オ ウ シ マ シ テ ウ ラ シ マ シ セ ウ

知否 シ ヤ ウ 不知 シ ヤ ラ 虚語 マ シ テ ウ ラ 勿言 ア エ タ ボ カ

罵辭 ゴニボ

甚罵辭 カキ 尊稱 ドシ

始 ハジメ

速 ハヤシ

近 チカ 遠 トホシ

強 ツヨク

美 ウツクシ

好 ウツクシ 惡 クワシ

奸 カウシ

醜 ブコウ

多 オホク 少 チカク

大 オホク

小 チカク

細 チカク 有 アル

無 ナシ

高貨 ウツクシ

低貨 ウツクシ 高價 カウ

賤價 チカク

幾何 イカドク

有幾 イカドク

可憂 ウレシク

可愛 ウツクシ

可憫 ウレシク

用心 イカク

破壞 クワシ

毀壞 クワシ

燒毀 ユキ

熱的 カウ

目的 メカ

失子 ウシ

細軟 チカク

言語 コトバ

足下幾歲 タビ

皮はカコトア良

名做什麼 ナニヲシ 尾 ビ

幾日開船 クニタビ

クニタビ

飲食

蒸餅 シロ

酒 サケ

燒酒 ウヰ

米 コメ

茶 チヤ

水 ミヅ

熱湯 カウ

玉黍薄餅 トシ

醋 ウヰ

醋 ウヰ

羊酪 ウヰ

酥 ウヰ

油 アブラ

煙草 タバコ

吃煙 タバコ

紙捲煙 タバコ

捲煙 ブル 塩 シ 内肺 カル子 黒糖 ハノ

白糖 シカラ 氷糖 ベシラ 香氣 ホクイル 臭氣 シ

衣帛

衣服 ロツ 帶 フ 襦 ウ 襟心 カ

表衣 シタ 額簷 カ 周簷帽 シ 襖 ウ

褲 ビン 履 サ 鈕鈎 ボ 手巾 ハン

褌 コ 毛布草被 ア 蓆 イ 絨褐 ウ

絹帛 セ 麻布 リ 木綿布 フ 線 セ

麻線 ウ 木綿線 フ 裁縫 コ 赤色 シ

黒色 ク 白色 ハ 黄色 キ

器賫

劍 サ 鏡 ニ 大礮 カ 斧 ノ

鋸 サ 行李 カル 尺籍 リ 帚 コ

樂器 カ 四絃樂器 シ 剃刀 カ 危丁 コ

針 シ 篋 カ 卓子 メ 睡床 カ

榻 ヒ 枕 ア 麻索 メ 石鹼 イ

板 タブラ 薪 トシヤ 烟管 セイバ 鎖 カシタ

鑰匙 ヤミ 剪カ テハラ 櫛 バイ子 紙 バシリ

角牌 バス 囊 ギリサ 扇斗 ビシヤル 塙 ボテヤ

小刀 子タタ 小把 テオトル 舞臺 匙 同上 コキマラ 火盆 バメ

沙鉢 タサ 蠟燭 ハラ 蠟燭 燭臺 カシゴロ 金 フロ

銀 プラタ 大銀錢 ハセタ 小銀錢 クナリ

舟船

三橋大船 フタタ 双橋船 フタタ 双橋小船 フタタ 單橋小船 ハシタ

舟 オボリ 大艇 オシヤ 脚艇 ホテ 舩 リモン

錨 アチク 抛錨 アチク 帆 ベラ 帆檣 バ

舟旗 シテマ 飯鐘 カニン 乘船 アホト 開帆 セシ

居室

家 カサ 内 アホウ 中間 ゼシト 井 ボソ

樓 タビラ 厠 コムシ 戲場 コナリマ

動物

馬 カロヨ 長耳馬 マケウ 驢 ホヲ 駱駝 カメイヨ

牛	バカ	豚	コチ	綿羊	ボンゴ	粗毛綿羊	カグミ
羊	オホ	鹿	バヤト	猫	ガト	山猫	モレガト
虎	ク	四足	カトクダ	獸乳	レチ	雄雞	カヨ
雌雞	ガイナ	吐	カヨク	鷺	バト	鴿	ハロマ
魚	イサナ	蝦	カマシ	海鱈	ハナナ	蛇	クビラ
蜥蜴	カチコシ	蚊	サマシ	蜂	ビクチ	蟻	オリミヤシ
虱	ロコシ	蛆	ガシノ	卵	ゴエホ		
植物							

玉黍	マリス	蒲萄	ウバ	甘蔗	カキヤ	蕃薯	カモテ
南瓜	カラス	西瓜	セシヤ	甜瓜	メロン	萩蘆竹	カリリ
蕪水	ブライル	小葉似 鬼燈大	トコテ	同上 微大	キトマテ	小果如小茄 大味甜美	イゴ
小果似枇杷 而長味厚	シホイラ	小果似 烏松実	ワモチ	菓樹似 霸王樹	ビタヤ	芭蕉實	ヒラマ

數量

一	コウノ	二	トウシ	三	テシイシ	四	クワトロ
五	シコ	六	セイシ	七	セイト	八	ヨウチウ
九	ノエベ	十	ケイシ	十一	ヨシセイ	十二	トウセイ

たがしるや

飲食

初太郎の序^留に云く角利希爾其の墨是可よ^留し
イヌバニヤ此開きし^留の時其國曆數千六百年^{慶長}
の頃より墨是可よ友府を建て是を造す故其俗
多し西洋の諸國は其の飲食は獸肉を多くして
一日小兩度たり^留然ハ^留過^留糖^留餡^留各^留刺^留茶^留を^留と^留る^留の
本^留は^留た^留よ^留菓^留菓^留を^留菓^留茶^留の^留こ^留と^留く^留る^留香^留氣^留を^留取^留り^留砂^留糖^留を^留

海^留して^留飲^留の^留菓^留糖^留を^留食^留す^留述^留たり^留を^留と^留焼^留の^留ハ^留取^留鹿^留
羊^留雜^留を^留の^留肉^留を^留塩^留者^留ナ^留り^留て^留食^留す^留菓^留餅^留を^留も^留焼^留して^留
食^留す^留る^留や^留の^留三^留日^留目^留は^留一^留日^留を^留三^留日^留も^留食^留す^留菓^留餅^留の^留味^留は^留甜^留味^留を^留好^留む^留菓^留餅^留の^留味^留は^留甜^留味^留を^留好^留む^留
又^留ト^留ミ^留ラ^留を^留食^留す^留菓^留餅^留の^留味^留は^留甜^留味^留を^留好^留む^留菓^留餅^留の^留味^留は^留甜^留味^留を^留好^留む^留

コウヒイ^留ハ^留樹^留を^留食^留す^留ハ^留た^留り^留一^留支^留本^留を^留食^留す^留樹^留皮^留を^留食^留す^留
ア^留シ^留ク^留木^留理^留を^留食^留す^留ハ^留枝^留を^留食^留す^留ハ^留木^留を^留食^留す^留ハ^留木^留を^留食^留す^留
菓^留の^留長^留は^留二^留寸^留斗^留り^留形^留栗^留の^留多^留き^留に^留似^留て^留頗^留滑^留ら^留し^留
先^留洞^留あり^留由^留重^留小^留洞^留あり^留其^留の^留出^留の^留味^留を^留食^留す^留
其^留菓^留の中^留に^留お^留き^留た^留る^留味^留あり^留樹^留皮^留の^留味^留を^留食^留す^留

古き様集のことし熟すれい紅なり搗て乾けい
黒きよ交す穀の中に二ツの豆のこときものあり
是を炒て粥の麿りて挽き碎き砂糖を滴せし
熟す湯を點すのむなり味香しく能飲食をせま
心身を健かす以眩を軽く風邪痰液を掃
温常赤を添き経水の色一肝胃子ま赤の諸病
を治し能く浮利を止めて志ろも秘法せず其
卵切能多々この卵より新字小識に見たり

西洋人好く是を用ひ

日者市酒と云ふ西瓜餅以て改めく食は是酒も
多し酒を葡萄酒と銘し焼酒河村去の銘も易
甘蔗汁より割取る多し酒も焼酒もあり味も然し味ハ
南亞墨利加の内極て炎熱の上地不海極大陽不
常熱せし事そ自能ふ少の上小飲りて生れたるを酒
来るといふを質極て細くして酒を多く味あり
那いビナギレといふ葡萄酒を造るの類あり

メサの圖

飲食の器
易の各

周囲の鏡

お布をたはし

まは白き西洋

おまの飲食の器

世帯の上子肉の器

沙流おまの器

一人の器

食次第を目的とする

とありて振する

梅くさるる器と起と

おまの器の子の器

テ子にルとて拍と成

浴衣のあふはる白き切

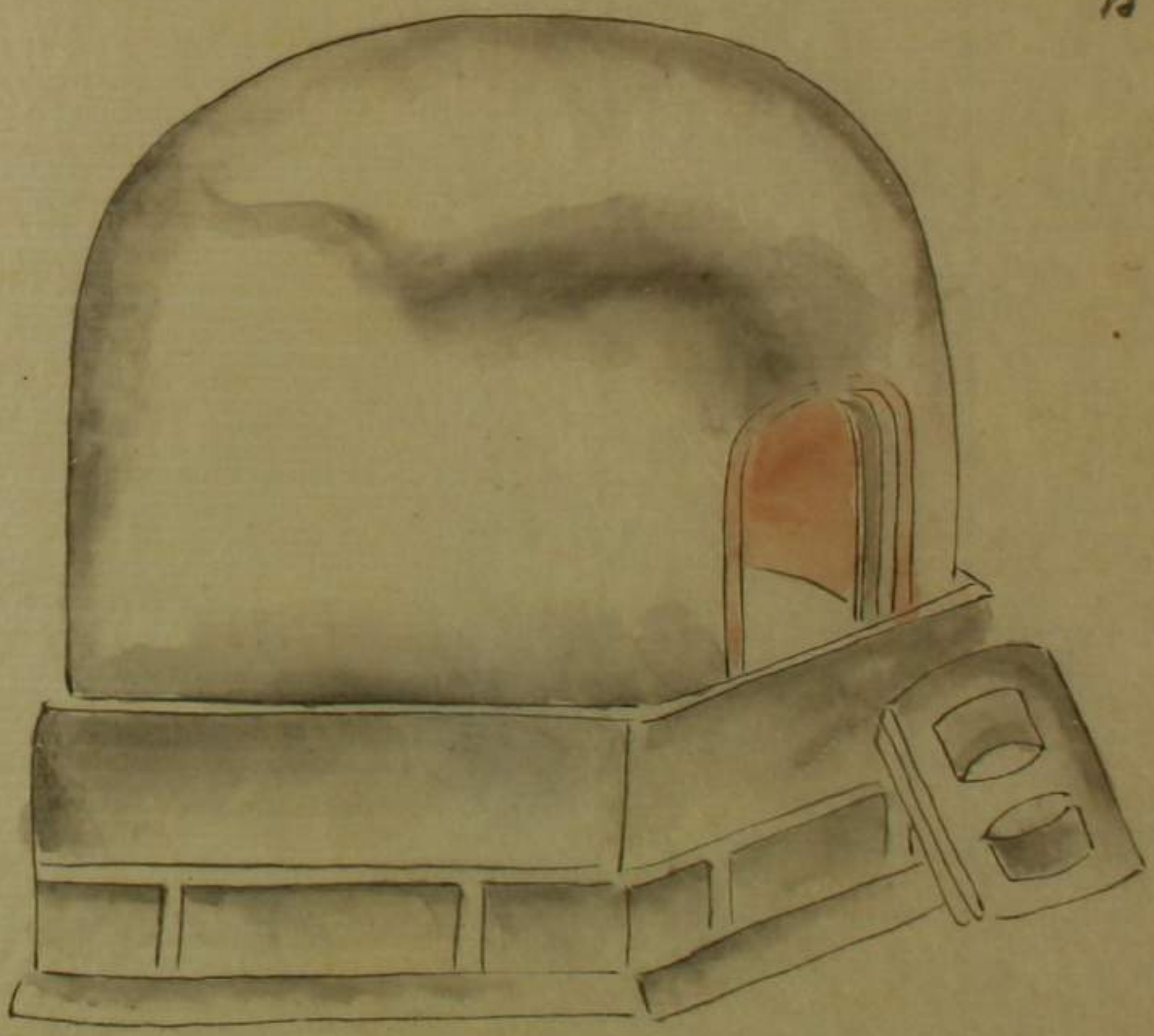
テ子にルとて食する



食物物蒸焼する器

竈此圖

木葉付く樹枝
筆より長き筆の柄へ
肉を挿除きする
用也



鋼の板の玉糍餅と

並ぶる圖



鋼板をのせし
竈の裏へ入
る火の圖

家より大なる竈あり名とある葉をて上を塗
ふまき土の竈のちと四五尺を築き四角の
竈尾より僅小く四方の竈の尾より大
火を焚き内の土赤くあるなり切新をこしく
一芸中枝葉木の枝葉を能く挿しむ葉の粉子
鶏卵と砂糖と液をまきその餅の形に作り
るをも鋼の板の上へ何枚も置き火をくわすの先き
のせき左の焼く竈の内へ金次や不並く火

煮木の枝葉をてこしく塞ぎ焼く時分
元出ー又卵の鋼板へのせきを入れ焼くなり是に
葉子の板あるものとき時を煮すとき見ゆこをも
竈少く焼く小豚牛の尻を丸あらし世竈に入せば
と塞ぎて一夜を三日出く食す南風を丸焼く
すよともいつくまを以て竈にて焼く散志るつらと
して味こよよあり

南風蕃薯なをよしく煮流し砂糖を添合せく

食物とす。事。つゝ

→ 玉黍の物よ、砂糖を合せて薄く蜜味のよとて焼
たるものありトルテヤといふ是も亦よく食する也

→ マンテネーといふ獸の乳は油をむき搦るものなり
まよをこよつけて食せたりといふ牛の乳を搾りて塩
をかくつてめぐるものなり削りて物をつけて食せりつ
ても白ひあつてもこのまて日ぬく食せし能はず

→ 物づくもの獸の内を食とす。故臭たはこして食せ^能

世すたれも皆て食せし。にありす時、物ヤめをも
何りる、難解なるもや多し言^言以て食すは口
といひてカラクン等の肉に削りて食せし。やうく
あつて容易に食する。よと好し

→ 煙草の多く紙をつけて巻く。亦の直は煙草の花をよせて
まよをちつけて飽む煙草もあれをも用ゆる事稀く
紙の幅を七分七寸と四寸とありて紙刺する煙草を
其中小巻にみせし。この方は火をつけて吸ふ。紙の幅

度きいふにありは煙草の多きとて是れ用ひたり

又煙草を直に食む事あり 是の煙草を細長く切りて是れ煙草にして
灰けをとりぬ糖す久煮候て塩りて

志の爲にせむしを根切しては合居居は所を煙草を中かへ碎くやいす幸許まは断で
捨之毛船掃傷を時す若便利のなる船の草煙の若くは粉よりけすを信用も有り

居室

家居も西洋人の用ふる如く西洋より築ある所あり初めて
舟より持ち来たカボサレ房に人々共二軒有り是れ其
の執り本録に詳なり是れ其田舎の法なる也一サボ
セ兼よマサトウとて柳を聚落をわしはぬ也カ

家居も頗結構なりあり町幅も広く居る人々共あり
去處造り少く壁の厚さ三間戸も有り在り築つても
あれと身入の垣土を築りて好まるとも其角の形あり
焼物ありたりして築らる所あり其の厚さ二階あり
其階も作り障子の皆紙なりあり張る骨は根あり
此の屋根の赤き瓦ありあり是れ町を築居る所は
能く構ひて建てる故見渡すと見えり有り内庭に
ある石を尾甲と土ありしなる也其築居りたり

考ふるに、井戸、廁などいへて、あつることを、あつて
販賣の地なる故、浴すよとす、よとす、あつて、浴室とす、
あつる

一 物も高し、店ハ、其腹を、ハ、羅沙、於、後、連、文、市、本、海
あつる、あつて、瀾、沙、結、の、結、も、甚、や、酒、産、ハ、確、よ、の
場、を、多、く、を、ハ、葡、萄、酒、ア、ラ、キ、燒、酒、其、他、酒、の、結、を、
賣、る、月、形、を、賣、り、又、ハ、ハ、也、賣、る、店、も、多、ク、サ、酒、店、
と、る、ん、が、ら、す、も、ハ、ハ、近、き、あ、つ、て、結、も、ハ、ハ、味、も、あ、つ、る。

一 月野、菜、の、結、を、と、目、の、の、と、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
賣、る、と、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

平生、ハ、ハ、ハ、及、て、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
き、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
あ、つ、て、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
各、々、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
焼、酒、を、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
あ、つ、て、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
あ、つ、て、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
あ、つ、て、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

おとろをかー衣服をカホンとつと長張の櫃の板
那とよのふ入れをよ書物ハ板を揃へその上ハ
様ちりへ並へ何けをちり集

地形

亜墨利加を五大洲のつちとして日本の西東にあり
家奥州の東邊より彼國の西邊にありて道を道凡三千
里たり地形南に長く南ハ墨瓦刺泥居加の海峡南極
北地五千四度二十分の所より北ハ欽尊の迫門北極北地
六十之度の所より南に長さ大約を海軍中間
巴那瑪とつくる幅十里の地を東より南に二部と

分ちわを墨是可亞墨利かといひ 即ち亞墨利かなり 南を字

リウ亞墨利かといひ 即ち南亞墨利かなり墨是可ハ即ち北とコ即ち又

とよと東西ハ所より 廣狭等一ちうされども 最も

初より西ハ一子二百里より 廣大なるを強くと

天下之方の一は南ハ亞墨利かといひ

加拿太といひ二を比兒及泥亞といひ三を花地といひ

四を新墨是可といひ五を墨是可といひ南亞墨利かハ

七の五分をて一ハ的亞刺查兒麻其二ハ字露を

之を智里其四ハ的亞刺墨瓦 臘泥加を五ハ銀河を

六ハ伯刺西兒を七ハ亞瑪作搦なるの事も數百里の

地より各大小の島田あり 英より高ハ大川湖水等も

多し 宋候も大なる月あり 墨是可の廣より 東加利別

私の海中より古巴分膏加ハ伊西把你亞等の諸大嶋其

餘數多の少嶋ありハ亞墨利かの大川を亞多刺五

令私といふ南亞墨利かの大川を亞瑪濱銀河といふ

南利弗系其輯ハ新墨是可の西濱より東江海のおよ

とくある地なり東の方内湾を抜哈南利弗其といひ
西の方外湾を過立峯南利弗其といひ
南の出岬は散律起といへる峰ありそ麓は南の散律加
といひ地即ち初大島なり舟より捨つるもその形なり

新字十歳に載す所南利弗其の地形氣候並に
其地より所の合換海路記等の記述より同所の
且初大島に流く水と頗る同一なり詳しきを解すに
及て此地内湾と外湾とを氣候を殊にするを記す

蓋し内湾ハ北東圍を以て且地勢多クハ東南に
向して氣候暖熱なり外湾ハ西に大海を交てる
山は皆くハ故地なり新字十歳に載す所南利弗其
南利弗其其ともつて一大島とせり舊圖にもあり
近東新刻の法圖より皆連接して島とせり初大島
の法すも亦と海に流るありさしに似しと記す
はすく親國の躬歴よりある事と記すなり

氣候

亞墨利加の地形南より隆るる長きう故より一州の内や
東候懸隔の遠しあり花地新墨是可、墨是可、銀河
等の地、冷暖順和なり、去地も海に肥美なり、北亞墨利加
の加拿太等の地、寒威なり、冬より夏の初より
迄雪なり、降志も南亞墨利加の智里の地も雪冷なり
河の初より氷なり、人畜死して久しきを候れ、其屍腐敗
せず、去人おりして冬を舟を船を昌せ、血内凍り

硬くて骨のちとくにかう、脈系を得れ、ハ、解けて肉
裂け骨脱して截れ、ハ、たす、極よなる事あり、墨是可
の属國、加拿太の地、南亞墨利加の的、刺、西見、麻、亞、馬
積、伯、刺、西、見、等、ハ、皆、極、極、ヤ、て、雪、を、多、す、墨、是、可、の
属國、厄、葛、利、屈、伐、の、地、ハ、甚、ハ、炎、熱、ナ、り、ハ、燬、り、お、と、く
冬ハ、江、を、お、り、て、雪、ふ、り、ナ、り、と、連、日、也、あ、す、南、亞、墨、利、加
の、字、露、地、ハ、赤、道、を、去、り、お、と、を、り、ハ、平、衍、曠
野、海、濱、砂、磧、の、地、ハ、炎、熱、中、で、浸、味、雨、多、く、お、り、お、り、山

击冻谷の間に寒凍の来たり多し中々も按埴松といふ
山と世界をふたつふと四時雪終らず是是可の
属国を薄私課の地はた雨多ししく西麻痺やも
すれは八九ヶ月より百多し晴ます及西当刺耶刺ハ七八
月の比雨多ししく雷電四方に起り且地震をふりしく
屋宇を壊へす事あり同く属をさし及西得未列の
地の是是可と巴那瑪との間にありて山は林多し
とも雨多しと云ふがく来候吹形らすと云ふ初来り

南利希其其の地も雨多しことを忘り一年中暖地
毎日己の別はよぢれ南の方より風吹来りて是来を拂ふと云ひ

人物

垂墨利加の人物を種類にならす大抵をまきて四種となる
其一は欧羅巴の法州伊西把依亞佛郎奈意太利亞語
厄利亜和東地等の人来りて住居するをのなりと云ふ
支利其飲といふ其地の婦女欧羅巴人と交りて産む者
ありと云ふを厄厄京私といふと云ふ元亞細亞亞弗利かの法由

くまりて住居する所の水と其四を海見埜といふ是
徒某の主人にて志野部麻呂恭なるものなる漢流
の事を業とて屋舎の制も形も男女上下の区別も形も
禽獸と異ならずとて初を布衣の裾をせし角利希爾其
何れの人物の衣服の西洋人のまじりたるもの形も人
ありとも形も眼も黒く髪も黒くといふ是尾正平私
の私記なるにや又巴太温等の地れ人の皆長大なりてそ
れ有餘の身軀なり横牛一疋を一夜に食ひ能く酒

教斗成徳む狀皮を衣とてたふらふ地携へるもの
を走らすとて此間亞瑪作物之近邊古佳耶昔松等の
地ハ其人短小なり又節を糸を軟く身も此一種の人物
過八郎といふ語をその神の役と脛も月おさけにて踵
長て後足も赤の趾も赤くも腰の形も字の字を倒
しおるる如く身肥大なりて大短く極て醜く容貌も
是等ハ加利儀那。南亞利加ニテリウとルノ子居
地者ありは食人國と云伯利西見亞瑪
作搦川邊巴太温等の主人と仰とめて人自其味あり

過八郎の種類は人物

男女老幼の児の園

此後又ハアハカク

今も玉の甲おあり



又墨是可字露赤の去人の男女老幼の園
たれども諸部のは流を離るる事を中央の
以ては去人の多く醜悪ゆて鄙陋なるは
身の若あり又初太麻の唐去りて多
物流は彼等ら流されたるハ
都此路分の地男女老も
巾使をもよお取て顔をは
ふ面交玉のこし

とらり

風俗

人第ハ熱々温和して慈也冷々困窮依憐ヲ
難哉救ヒ親戚睦し〜禮義以〜能く定法を
守り妄不闘論喧嘩を以家業茂る〜逸樂不耽
ら凡至極清り多風俗ハ可也

一男子ハ叙子〜起〜下人哉起〜手水を以て我懶
〜煙茶我飲あり〜家の内我あり〜茶行〜飲
食の出来〜我侍の婦人ハ少〜進〜祀〜手水



ト〜〜おの〜

ゆ〜

〜

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

をひ男子とてふ飲食す

九人衆に至るまで先ボイノジイマス。コモトスラン。あとも挨拶

一右の身をわきへ 互に挿り 合ふあと形なり 淫

そたの身をわきへ 大に忌む嫌ふといつ 扱束を返す煙

草をのむあとはささくもかゝる おとら 車い心砂糖を
かてのむ 影も

終りあはれ時ハ又アリマス。アスタロコゴをとり 挨拶して

身を挿り合ふふきありあをさく ふき 時ハ男女長

初の差別あり 互に腋下より身を挿り 挿り 礎と

抱き合ふと落残を挿り 抱あり

一右を四時を限りて 皆門戸 城壁 老人も往來

きききあく 然ら 七ツ時より 起出く 籠りの業 故勅

笑人 籠りの人 唯家の内 城壁 歩く 一 居るあり

一男女とも四五日 目を必谷川 水に浴び 決り

肌を人に見せ 女は 猶 文 慎み あり 前後 城壁 つけ

うさ 後き 忌物を 看あり 一 忌物 中へ 手 袋

うさ 又 肌を 洗ふ とき 下 城 洗ふ 時ハ

必ふげ森らけをよの人の見ざる所へ往て洗ふ洗ひ
羊りて執る衣被を着け各々家へ歸りたり初大
布もサニホセヨとは時く家々の娘をとり伴ひ
川へゆき水哉あらし終に肌を足言ふと形
三升トラシマシハ堅木を大なる箱を扱ありと家内
目振るを箱よりとりてあや成りあり
一士人中心の志は必二日毎に衣被成忘れぬ箱の
時の銃炮成りげと山中へ獵りたり又ハ溪邊へ

出て釣せまゝあり人々奇合と酒をのむ
おとあはしむ日本のおとく強押おとくは松の
まゝくは日叶を飲食し海なきものハ先づ油を
文字ハ横文字を西洋と同一形アベをいふ平
八字あり其文字をくさう續けといふくの語とある
筆をさるの羽の草成削りて書く書ハ何やらん思
さ汁の極なるものあり
此所阿蒙のくまトあり
製法洋金密閉家見也紙も何處迄
残と目振るを箱とて大をさる時ハ封目り

赤ら指の振るゝ者、彼火の淋し、てつじ甚上、小判
を押しあり

一、武器ハ此の銃炮と云々、銀の貸きたると、大^大吉の
この片等々の朝、月ひた、銀ハあきても、実をいふと
とて、格別切、るもの、非ず、夫也、則、術といふと
ハ、誰をも知、る、根子も、有、鉄炮の、敏ハ、ま、い、小
取、や、う、せ、う、火繩ハ、ち、く、引、合、の、名、も、火、^火石、^火石、^火
よ、ひ、て、歩、つ、を、架

海軍備中の時

一、銀の、大、お、元
喇叭吹出さけ
音



銃陣調練之序

喇叭吹て人を馳引

隊を解き打て下知をえ

或は進み或は退す或は

圍む或は攻む或はた

或は右或は左或は

餘りあし色々の備をえ

銃炮を打ちも或は立

たり或は中隊に散り

或は片隊をつまみお

或は陣圖をえりて

登り下りしとあり

かや深あるとあり

或は政装をえりて

或は或は子能く

打ちて射す十挺の多銃

少も速速にや一隊に

只一撃のときや内は列

や御守は撃てて馳引て

後色 小川より飛く隊士の侍をえりて



銃卒 フルダト



肩きりしを
 おしこし
 古き酒瓶の
 皮の紐をたの
 肩より右に掛(か)はし衣
 かけ十(じゅう)二(に)中(ちゆう)二(に)裁(ざい)ま
 けし一(いち)二(に)早(はや)急(きゅう)を多く(おほく)入(い)れお(お)か(か)し

一 烏(く)も焼(や)くま(ま)の女(に)も不(ふ)淨(じやう)を切(き)るま(ま)と形(かたち)唯(ただ)付(つ)
 糸(いと)を切(き)るま(ま)なり。夫(つま)也(なり)を切(き)るま(ま)十(じゅう)町(まち)を深(ふか)くし
 水(みづ)を流(なが)す使(つか)りしを以(もつ)て物(もの)ハ甘(あま)藷(じゆ)小麦(こむぎ)玉(たま)黍(と)
 さの油(あぶら)芋(いも)西(にし)瓜(か)南(なん)瓜(か)の類(るい)又(また)ハ大(おほ)蒜(しん)葱(そう)生(なま)姜(が)
 野(の)菜(さい)の類(るい)も何(なに)れ不(ふ)淨(じやう)ハ古(ふる)ふ銀(ぎん)を切(き)り
 人(ひと)をやとひしを棄(す)るま(ま)なり
 中(ちゆう)以上の者(もの)ハ迎(むか)え所(ところ)へしりまも必(かならず)馬(うま)よりの大(おほ)家(け)
 者(もの)ハ数(かず)十(じゅう)疋(びつ)の馬(うま)を飼(か)ひ居(ゐ)るを賣(う)つ所の者(もの)も

を正武正の馬をよめぬものは引 鞍ハ多く白
木より銀の飾り有り 轡ハ銀或ハ鉄その他は
澄ら輝のおききりある 履をたはらう 其車ハ足
をきりゆく 糸をきり 月面の如くふたき車のついで
そのありて馬を走らせんと思ふ時ハ 蹄を踏ませ
其車よりくるの後我々の走らせし 古くおけ出らん
衣類をも用ゆ 形日本 鞆より 飾りと細
をきり方ちり 結糸杖組の中 心を合せ扱へり

もあつ 鞆と多め 言ひて 形ゆかり 糸とあつ
物造家や集らん 必馬ハ 糸とあつ 廻り道中
ちり十見 五三葉の 飾り 馬を弄ひ 糸とあつ
らん 馬術の 糸とあつ 糸とあつ 糸とあつ
糸とあつ 馬の 飾り 糸とあつ 糸とあつ
下級の 糸とあつ 糸とあつ 糸とあつ 糸とあつ
糸とあつ 道中 糸とあつ 糸とあつ 糸とあつ
横向ふ 糸とあつ 糸とあつ 糸とあつ



婦人轎カゴやきりて目

とふたはちのさの
 帷カウリをかひてきり
 あり



一 轎カゴを世に極をとりてはくをいぬの趣をのそ
 あり 銀の合カゴのゆきとありは栞カゴ城うけ帷カウリを
 雲カゴよりぬきゆきとありは夫と後と感
 ありて中カゴのゆきとありは高カゴの載せと
 ありあり

一 婿カゴの禮を婚と婦と成カゴ向ひて見ぬの趣を
 細カゴとて中カゴのゆきとありは首カゴのありとありの
 頭カゴのありとありの成カゴ指カゴと女の戒カゴ指カゴととありとあり



贅婿は成乃不
アメリカ語をばカサルト
コリン

さかひのそ

廿五の指を除くハツ
の指よりハツをさす

衣と衣のふり

念をせよとく媒の者側をいふ人色あつて戒の

詞と云ひつるや何やらん以て喝して新し水成金

たつて衣折衣を折子に極ある物を極りて衣の

上つるをかくる。女又男女のふりて見男の衣を

と女の衣のふり極り何れも男ハ衣女の衣のふり極

やと云ふ。極極をさす。世様の名を極極とせしめ

たつて衣のふり極り何れも男ハ衣女の衣のふり極

ハツ時より時を七時以て述の男長くと祝言はす思を境

とも。竊に金ハ指をさす。立合たる人ありて衣を

音も衣あり酒をのりて祝ひたり

一男女とも一とひ婚を結ひては生涯に成意ありあはし

女を元より男もとも一生の肉を夫婦の膚を觸りて

成服と成衣ハ大抵のよきハ互に堪忍を有。夫ハ妻を正

家。妻ハ夫を正敬ひて極むつ。と云ふ。方一ハ義を

ありて去らざりし時。女ハ生涯に夫と人命男子に致す

妻を娶ふなり男ハ十六歳以上六十四歳以下と婚姻の期とい
 二十歳以上の婦は獨化のものハ稀なりさき志ある者ハ
 必一々の業と欲絶せざる月ハ折る事哉といふものも
 あり左五十五歳もろつて十六七の妻を持たる者もあり
 一夫婦つまむる道と歩む時ハ必妻の衣の巾衣丈の丸の
 襪もさき引つて歩むあり

一 送瘡ハ瘡業といふ者形々ある丸業の業也又重なる
 此脈と云ふ所の片ハ小使時本を括居る脈の遲速を考ふ

根子あり腕の如しは枝葉を刺し血を取ることあり凡
 一医者ハ人の死骸を看ることも解剖して人命此道理を
 窮めたるものハ非ざれば滅の医者ハあらずといふ瘡瘡ハ
 多クハ天引と云ふ形々送者ハ送瘡瘡の例あり
 て初少の内ハ腕の力と云ふものあり枝葉をさし悪血を
 出されハ生涯病瘡を患ふといふた由一々瘡瘡を後
 るものありて天引の瘡瘡をさすものあり左ハ百
 人の九十六七人送面ハ瘡瘡の痕あるものあり

梅子あり
 おせい

神を帝の宮達き下 既に入電瘧瘧と心通るややはやそり引瘧の術を一つ
近來西洋より行く引瘧の法は其より大牛瘧の流をとりて後くり
極つゆくもものより大法をとりて之流を血中へ輸送せしむる事にて之
瘧瘧却りて瘧とあり故に印も二つに分る事ありて後を再す
夫れ^所の事と感せられたり有る大瘧瘧の四つあり此瘧瘧より行くと一進
東引瘧新言と云ふ船東せりて之を瘧瘧を多し詳あり是れ瘧瘧を
人傳し中より其ハ言語の通一十分ありたりてり中瘧瘧にて本文の事
行くと其れは人傳一天池の君道理小瘧瘧ありて其れは瘧瘧を多し瘧瘧の行
究ると其れは又行くと新瘧瘧ありて其れは瘧瘧の行と
有瘧瘧の事ありて足りて瘧瘧を却りて可き事なりとの事

壽命ハ大抵六十歳上壽といふ二十歳歳^歳なるもの稀
あり故に兒童の成長も急なりて六七歳にもなるハ相
應に智急出果てて他人の事ハ借^ま借^まの應

對多毒一て物也

夫れもカリホルニアのこのおとまりありア
メリカ河ありて物もなありて一船年歳ハ

いふアメリカの父バスコ北地土人長く壽ありては南アメリカの
フレイルの地も夫の壽長ありて動も其れは南アメリカの

一人死する時ハ骨を板する長を以相を擡ぐ死體を生年

は仰向の骨をせ思ひ衣被を着せ平生愛せし道具

を其れに入し骨を蓋をとりて之を本^所を瘧瘧の山野に持り

其れを斗も深く穴を掘り其中に骨を刺のあり其れを

蓋の上へ切かけ其上に土を覆ひ又刺を蓋に又土を覆

ひかくの事ハ瘧瘧の事なりて其れを瘧瘧の事なりて其れを瘧瘧の事なり

市城遠きしよきも 形再び生るるかへんこと形
追善法事をなすも 新を承くおと大狼の
振りしはぬめありとそ君医者何して生骸と屋めは
留まの人まも少も拒まぬ医者共と解體させ
るこ土俗のいふ人死まれ魂は天に升る屍骸は元土
より生せ^も毛の毛又土よか^るさ^を形ま^いん^かみ^いめ^と
同^一土あり^たは^は医者^と与^て解剖^せし^むま^は世界^の
益と^{なり}し^し却^る死^した^る人の^為も^{ある}と^らり

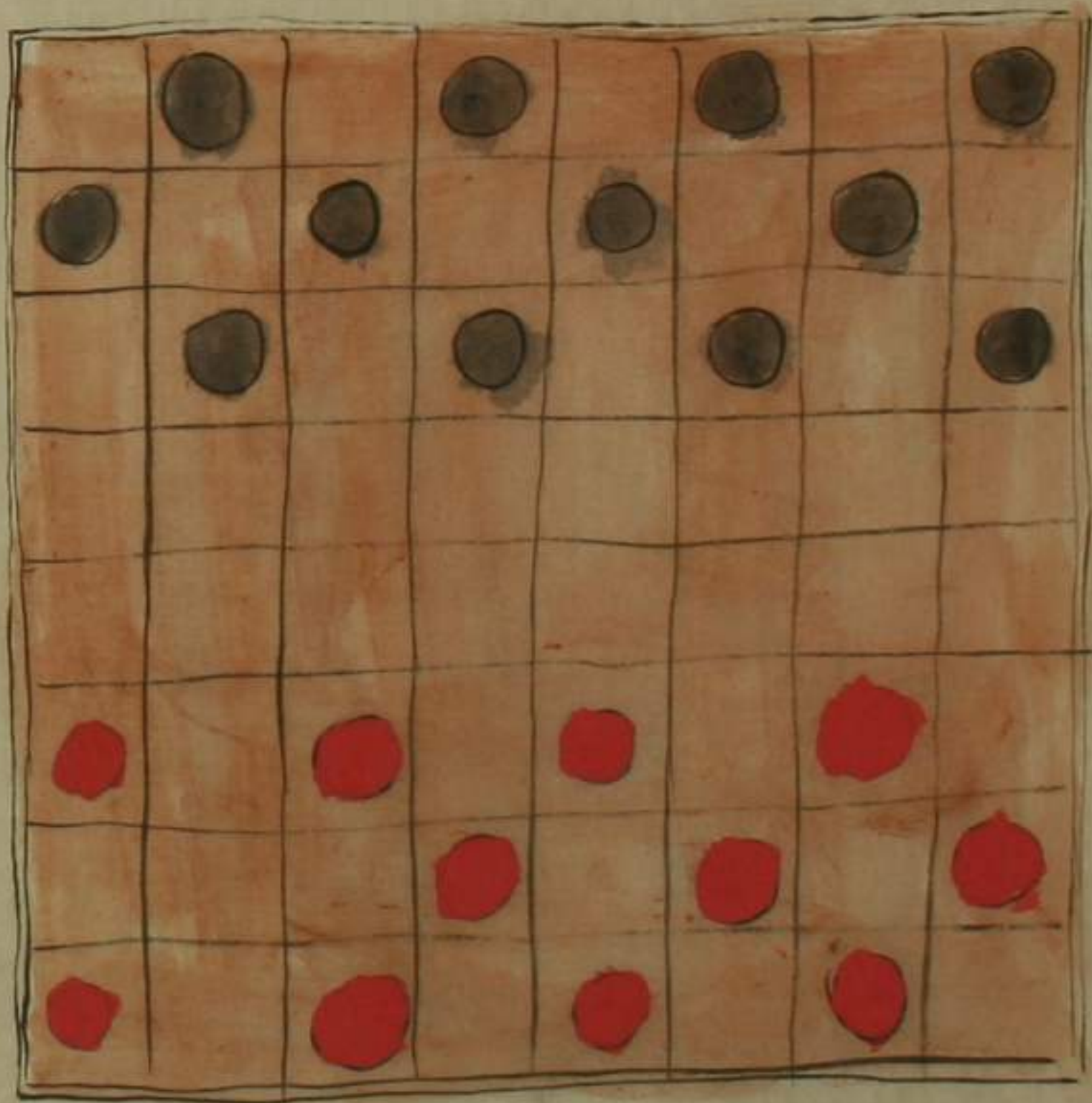
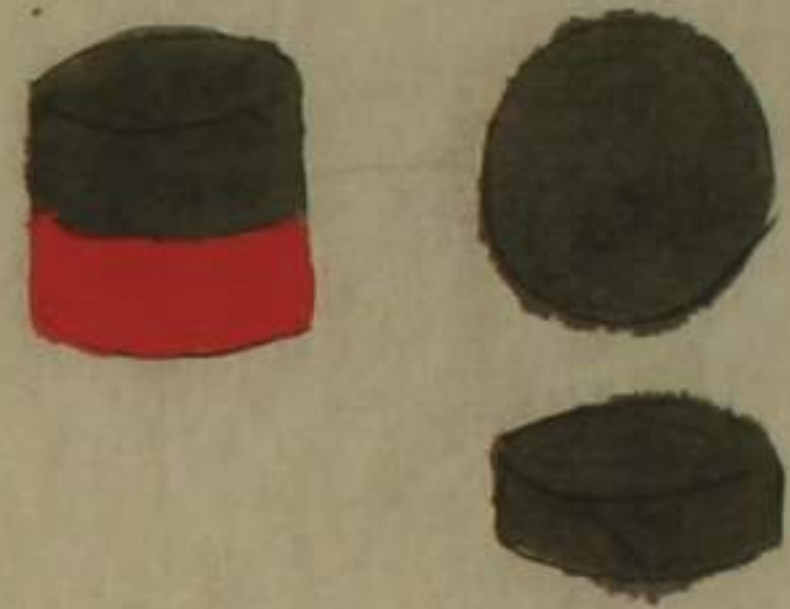
遊戯

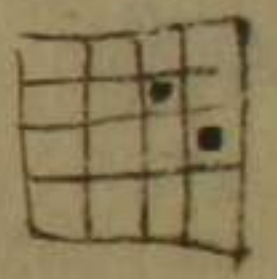
歌音曲をもあり 雲是冊の都^とる^るコ^ノリ^ヤと^いひ
る^る芝^生者^も 花^のあり^しとい^ふ楽^器も^は笛^を報^る
三味線と^奏ふ^は似^{たり}と^のあり^し笛^は縦^笛横^笛の^別
あり^し古^歌も^は大^少あり^し形^を大^抵り^は小^同し^し志^を報^る
ハ^形一^に三^味線^の似^{たり}と^の胸^の裏^表も^は板^を報^る
地^張り^の線^は口^笛り^と小^さき^き撥^をと^り琴^の形^を
と^のさ^きと^三尺^の形^のの^箱が^ヤサ^ン板^をと^り板^をと^り



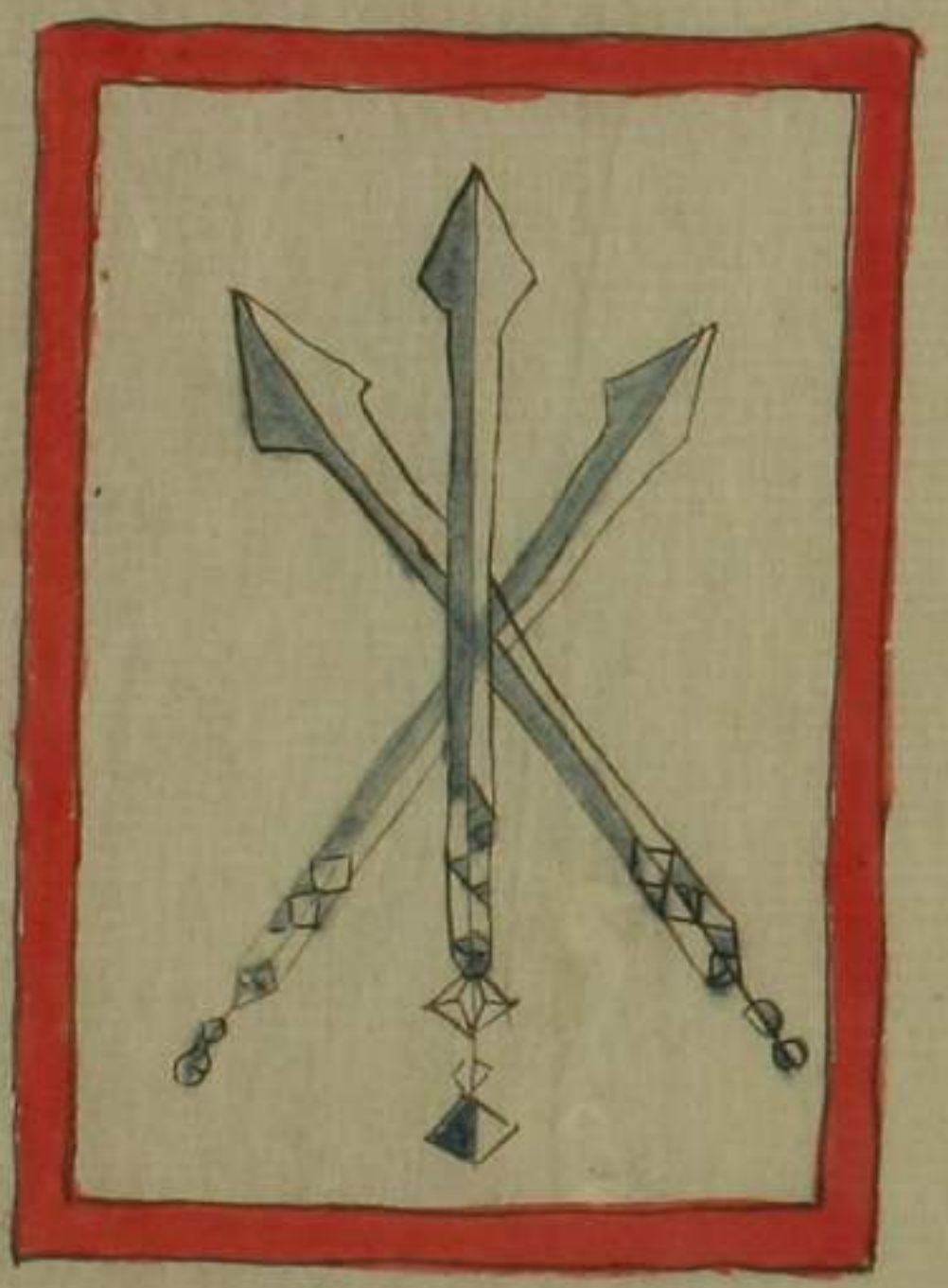
機關ありあふ一服飲まぬものもあふ多分の
 板場をうたふもあつて成りて並横文字とも
 付たり此の傍にも多しよものゆえ甘菊のせま成
 りあつて十本の指え多分の板場ありあつて押
 せは若の中よは満一の音あつても板も流るゝ
 りるちり
 一多分の指あつてもあり局子もに成るゝ
 此のよと多しよの音局を回すゝて八道

あま子ハ丸一何と支ハ一弓ヲ斜ニ行アリ互ハ
 子成リテ行進シテ時を敵子成ルル敵の子成ル
 敵由テ即チ敵の子成ルル敵の子ニツニツ連リ
 ありテ一度中絶ヒ敵ニツニツも片合キテ
 進マレク行キテ不却ルルを許スル進むを極
 其向方の端の道不レ進ハ今ハ敵の子成ル子
 の上ハ加ヘテ是を隣トす既ニ隣ニ子ハ却ルル
 許スル如クのおとしく敵の子成取つて成



勝とするありしは敵の子と  馬の舌く末は時
 毒の子をとりたる縁を傳ひ花被く二つ共とて
 一角牌の籤をとりばらハといふ此敵を可て好子
 此を戦ばらハナヲガレといふ牌の數ハ四十枚を有て
 紙をとりし毒く深て金の様根有り様根起と
 人物と戦画く志すハ大抵日本の氣合せといふ
 そのありし様根をゆがせりなるあり 牌は貴族
 の不あり四人のサカキあり 四角より圍とある

此は強りて輸贏とは此の時を名對時といふ
 此は牌と古令一ト教へ四人の能く有りて勝負あり



此を牌と名を合せ合すおは目本の如く此は
 横より取らるるあり

一 踢球テキキウの戯シまあり本々丸まゝの練子斗トウりや相サマの
人ヒト互タガヒに遊アソビ城シヤウ踢キキウ目的テを定め居イる踏フミ當マりたる後ノチに
一 初ハジメ方カタが通トウる申マウ子コ日ヒ本ホン人ニンの土ツチ人ニンと相サマ横ヨコとし成ナリ見ミしと
あり去ク人ニンの皆みな大ダイ兵ヘイなるを組クミ合アヒては御ミと力チカラとあはれ
押オシ倒タるマシても離ワカれ去クて不フさシ日ヒ本ホンの相サマ撲ムクのシ
を知らせは安ヤスく候マウるマシ去ク人ニンの是コトもシ々々
日ヒ知チ人ニンを欺ウソきテ倒タすマシとシ地チもシ去ク後ノチあり
とて怒イカリりマシとあり

亞墨利加より使船を得て唐土

廣東へ渡りて此の法

ラッパスの船隊に入るとして者有りてあつてサンボセへも
時トキに来キりレケリキヨウサと候マウくシ性セイ集シツ一イツ初ハジメ方カタ弟テイの
能ノくシ新シンの法ホウたりマシるマシ十月ジュウゲツ此コノ初ハジメ方カタ弟テイのシ法ホウ宿シュク
を性セイ集シツへシ初ハジメ方カタ弟テイのシ日ヒ本ホン人ニンの志シ
阿アとシ同ドウ初ハジメ方カタ弟テイのシ父母フボウのシ故コト留ルをシおシ持チ

くも忘れおしと暮るべし日物らと
あかきと以計た
にナリナ言事も其方を養子にせんとの志何故か
の志いふ事志有りてハ帰玉に欺るべし
た家なるよ再ナリ
事も解て往返すは
は彼地の業内を家宛れり
江尾
船形に彼地へ来る
を何り
此路より艘あり船
由風の便よ
雪^{キチ}江尾の日本へ通高する事
成れハ我往々甚事解
船^ヒ形雨せんとの
あかきべし
先ッ答^カ助と一所の
お法^{ダン}何つく
御^フつ^ル也^ンより使^スあつて
ラッス^フ^ル書^カ籍^ヒ也
送^ルり^テ助^ル

かたまをたし
そのまをたし
もたし
名を其後
べしが
船は
吾助を
あつて
サニホセ
へ侍ひ
来り
く^ル理^ヲ
助^ル伊^ハ利^シ也
未^カも
家^ノま^と共^ニホ
し^キり
帰^ルり
船^ノり
一^ト成^ルる
九人集り
て
洋^ノ邊^ノに
誰^レも
い^ハズ
と
ホ^シト
ス
こ
へ
向^リて
事^ヲ也
帰^ルん
云^フれ
ハ
各^々
申^ス
松^ノ善^ノ助^ノ
和^ノ吉^ノ
市^ノの
あ^いへ
別^レて
お^しせ^られ
放^ツ去^レる
とも
船^ノ内^ノ
に
七^人の
若^しい
日^々
と
春^ノ業^ノ
は
つ^とい^ふ
間^ノ
に
海^ノ邊^ノも
知^ル
事^ノの^カ解^ル程^ノ
の
海^ノ路^ノ
大^ニ
義^ヲ
あ^れども
妻^ノ人^ノ
海^ノに
直^ニ

取斗は結りぬを辭と拵つて中々人のあふ船新して
初を船へい各物辞を家らの宅に侍し海の家内の若く
射マサトラン入用事何うて仕ぶきしと何とおお
弟れどいぞり千ヨウサの妻のいづなる事にて初や同
初を船彼地の極子ともいふく又家といふも
たきこの一を言ふも故妻のいふこと能くすマサトラン
え船中女の地をぬに見苦くあらぬ極子といふ斗のその
初から衣服をぬく如く一且初夕の食事一少も
種この池をとおす若船も同く家よ遠めくつて
十月廿九日比べこの船出帆の中出帆サされた家内の母子
おの極子を推したる俤ありや何らごとくいふん
くと船中をたぐみ初を船中をとり抱きめて歎き
別れある。凡世地すてハ男女をわすれぬの白ち極く深く
眼トクいふんくはななく別れとさしとる手ととる合抱を合て
別れとく人拵マサトラン千ヨウサの子も馬よあつて七人の若
元一雨よ涙をこぼしきり見送る別れとく初を船中を

の商人もこの船に乗せてゐるに九四百石積もるに
帆柱は本組の七人の郎日出航して廿五日より
印度の多向し船部より天竺国へ向強りこれに
五日目ヨコサトウへ着てこれをも折良路乗船乗り
合さるればむべのこと同道を其所の願ふおひりと
いふ人の家より使船に乗じて帰西へてなりを
おるも彼人中極北亞里利かの内より折良の唐土へ
使船も何べいしん家合せ見るとともなるが故程

船の商人の所より幸四日北内は唐土へ出航の船あり
この船にせまられたる商人ベロンの向しサンホセに
訪する七人の考に我事より根苦も多し何とそ一
不運神のたるともそれなべにこの地より唐土へ
使船有る事一昨年より一昨年より一昨年より此船に乗
候れていつか海へん船をたつて海上と四百里
も向るサンホセへ七人の考を迎ひしに往るに往返の程は
数十日ありしに彼船のついでむねく訪てありしに城は

得たるは昔の便船をれ、帰玉の志あり、いふに
海より七人と見ゆす、事ハとも計りあらず、
先ハあなづき合て云や、先年計りしは、
しや塔々の舟事を告げあは、旧里の人々をたづ
ずの義理をたて、此使船よたれ、九人とも
むる、世よ朽果んとも斗強しと心を決
然らば、先年あ人の波海す、と云はれ、
べし、此知て初を師と賜ち、まうて此地よ、
現

アタリカ
根張一
不目七
行

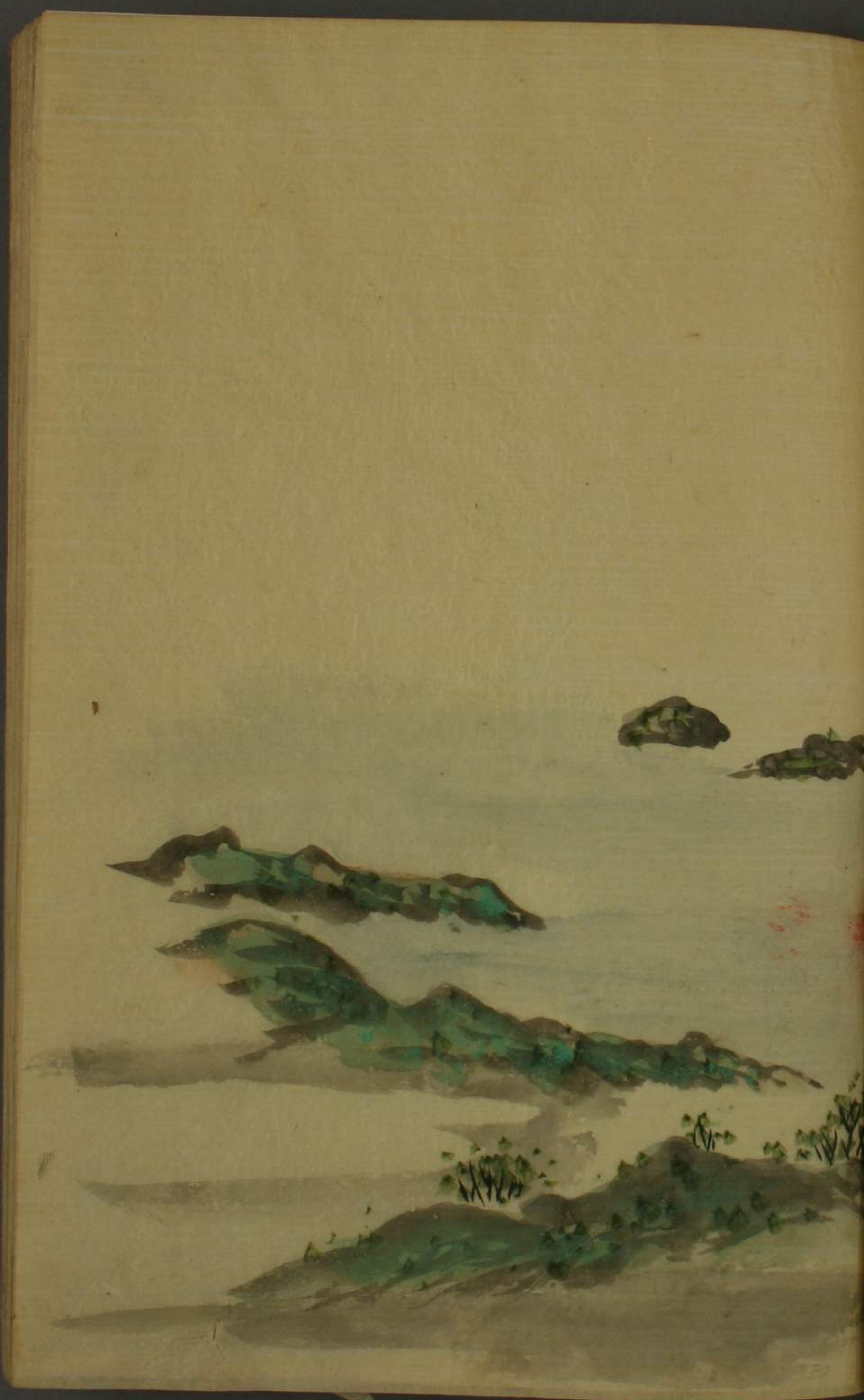
こゝの世流、一、回座の如く、家よ止る、
ゆする、あつサ、おせの家、まづ、
此地よ、世事をやつけたりと、
初を師よ、向ひ、方、
娘と書、あなづき、
安樂よ、暮さす、
初を師よ、す、
らうも、

ありあつていひはるも老たる父母を國に歸したる何卒
 歸らしてまゐひれく好し一帯心も皆さはしとてあはれ
 る一帯心も皆さはしとてあはれ
 歸國させ給ふとすめしうもさしきりちヨウサ衛子綱印
 舟船の舟子抱りていぢよもとさし抱合て舟船を結
 別れありん此のサトウシンの地人衆七百斗衆の何う
 さぬさし給造りよさきる為を甚るさ多分の階之階
 の造りなり勢一町の間日一極ま掛ひ町幅も後之階

水桶の形

舟の舟子も多し抱く
 縁籠を合しりあを
 の目ぞ川轉一り
 水も





コサトエミナト
塙撒先陣奥門
く号

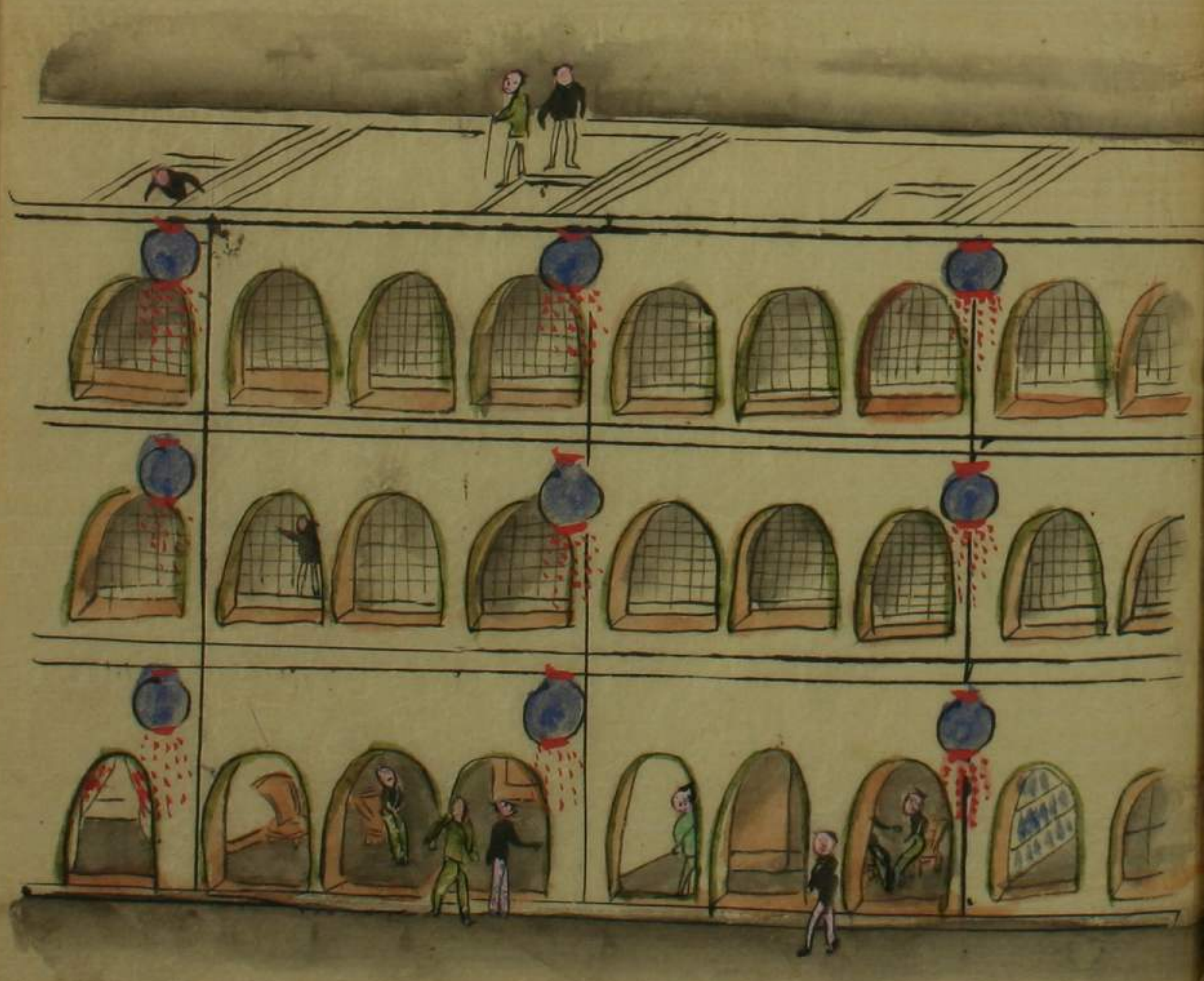
所々要害の塔あり
石火事の昔傳あり



店より硝子の暖^{ナリ}を多く並べ種々の美酒を賣り
 其種店より羅^ラ紗^シ羽^ウ毛^モ奴^ヌ西洋布花布の類を飾るに
 其作因店々とも多し此所の同屋の主人又此と世お
 初より都々物商人を引連所地の大名家を廻り日本人
 を降由せしむの由を述べて合力をおられ銀錢
 を五枚七枚何れも以て砂三千枚振子の意^イ家^カ
 子には五枚七枚も多し以て多し其枚或百六十枚
 何れし肉百枚を船賃とて彼奴へ渡し衣被とも

瑪撒克圍三階
造人家の意

石橋の上を歩くと
 石灰塗す一両り
 水板の窓何り肉より
 椅子をかきつけたり
 窓の意軒を以て
 焼花をうけぬ
 大ととぬゆ
 町筋むくぬり
 昔ホ塔官人なる
 の体なり



日二階造り高家
の号

履鋪酒肆内店。

雑貨鋪の体



少く洞へ折る百四枚板をありよまへ帰るまで
雑貨より下と取り三日月よをベロンあ人は服乞
しくサとおせよ帰るおまは其時あ人より七三郎
をとりめ七人のあまはるをとりわたりるをベロン
中松一財子の雑用多のあまはけしあはし便船の
つるまはあまはるおまはるは送るあまはるは
合ひ姑のあまはるサとおせへ帰るあまはるのあまはる
り初まはるあまはるのあまはるあまはるあまはるあまはる

又べしとてあ人を故郷へ帰さんとしてあへて世捨て
— 元候実のころ志願のこいつを神佛の加護してあへる
若むの人— ちめらう^音— ね— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
萬里の波濤を凌ぎ日おしぬらうと志すも心安あぬ
る— とおもひ— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
する事— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
を出帆— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
此の航路十時り洋帆— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
唐土へ男おし行く船を— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
船の帆風よ多のの帆をたぐぬる事船の速なる事— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
言語よ及び船— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
このい事をおぼし— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
進速をたのす— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
何時よも何方よ磯の— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
何れのおよのを— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一— 一—
知り敷^お里は^お乃を克^おりても湊へ入船する時^おら^おと

うろくきあつがーも遠くすま入る也又種々乃
道具眼鏡等とて日輪を望み夜数を測り今も
此船何十何百何分の可なりといふをさつまに
知ると船中の人初を命守り中極唐古日記
船を山を見失ふ時舟首より森あり船中
日也山と一板ハ星と云とす故に万里の海上
海へとも日と星と云とす失ふがれハ赤穂と
志しと船一着敷日ありて日と星と云とす

志心を方するの又洋中にてのなる河波河に
忍ぶとて船れも唯陸地と知て磯に船先
事と云とす、と云とす、既よも年々も暮れて
卯二月と船洋中より春を迎ふ漸く唐古
近く飛ハ海水の交^水濁まり其濁まり余程
沖より唐古の漁船多し何れ地方を離る事
数千里船故常く西の船行て糸サ新水好也
送るなりマサト云を云ふ凡七十日にて唐古

廣東の隣に澳門といふ所は名す外書云ハ 以て五月
中旬の事なりマカウと云 船より日目は物吉麻之入港し
よれより故吾船と云ふは上の船より以て船をれど
船にせずされしよりて持来りし銀貨二十枚を
とて以て吾船より別れあるは船の船少く陸し
より少くしりしに唐人船多し集りてありと
尋る所なれども言語通じざれば砂の上へ毎日本
人と書て見せられし點額にて何れもおしひはせり唐

人の物に皆以ては海よりを利て陸の船より丸く
船よりありしは後ろへたしより衣類も今長崎へ渡
来の唐人とわかれしより此処に家凡そ方船より
高家船をよぶされとも町幅はめて狭し傳ひはれ
しは六方舟より二十間斗り奥はとも同し
程よりありの船は二階の板張なり屋根は木を志
尾せ草草さたり家よりアメリカの人を中取れり榮
院の風を熱して此地の人物七分の唐人三分外

因入入と云はり外國の高船を千餘艘も碇をたらし
船乗りは且天皇呂宋喫吃刺を始め流石の人の御學
天皇の人を面作唐人より買しすはは驚きあし
所し時ハ所す利で長き路中をわが了居る丈々
高く為肥さう呂宋の人を同松松あれも天皇のわが
之のえ業人より似さうそ解西洋人より大格一極さう又
此のあま去辛丑十月は漂流したるかか足能也との
國風を郡水月村の若お七七浮三とてあし入又
十年斗う此のあま漂流したる肥後の國川尻のまの
店店就事と云能左郎と云三人皆くあま居る漂流
の始末さう今に在るあまの次男を具にお徳をれを
いしと云れはたゆひとて都て初を長ハ二月中旬より
此家家よりあの人々等と因居し食事を以新持の
後後をわけて年無月の朝を個へみつら
日切風あさうらつて食し流も整し日おはすおたり
始て月代をせし時ハこそお嬉しうらりとお樂

前子此不才ハ曆も何ともぬれハ日月とも女
〜知れ〜又遠道中以肥後の子孫^透れ前〜見物
せり社と名一きり一向は女と佛園ハ何事〜あり何れも
日本の草葉集のものを流し似たり戦場も何うて見物
せ〜あより何ともいふは〜いし〜之は芝居を〜い
可〜何〜事〜も〜難〜ひ〜と〜せ〜る〜と〜由〜本〜戸〜を〜い〜
ちとも好〜難〜ひ〜ても〜えん〜は〜身〜な〜り〜男〜女〜の〜染〜ハ〜長〜崎〜あ〜て
商の海島より〜も〜あり〜る〜一〜女〜子〜ハ〜足〜の〜わ〜き〜ま〜せ

〜と〜す〜る〜由〜を〜知〜る〜事〜一〜飢〜を〜是〜を〜難〜ひ〜大〜き〜
お〜ぬ〜れ〜す〜一〜教〜士〜の〜是〜も〜も〜七〜八〜年〜の〜お〜見〜の〜い〜
あ〜れ〜り〜縁〜を〜あ〜ら〜て〜あ〜の〜お〜え〜ら〜る〜一〜さ〜き〜一〜あ〜月
中旬より卯月十日より凡九十日とある瀬川十道
る世集

廣東澳門
之圖

此所少橋河
了英船
の船場



世所少橋河
了英船
の船場



廣東より長浦へ渡送せられ日おし海へ出

四月坊子泊りて此所より長浦へ役船ありとのりる

右船長の若くは船長と云くは船長と云く四月十日

に出帆す此時肥後の若狭の舟に近年唐土と西

洋と戦ひのつりし船をねまき力みて世にひし船

浪の勢お持しし舟は西洋の間若と特し

此所より残しきて然るべしといふありし頃より

ふらふら肥後の若くはふらふら熱る漂流人を外國より
送り來りて廣東の都下より是すれは友命ありて陸
地を渡送す廣東より江西へ都陽を過り漸
江よりして長澳つゝ是く時ハ寧波まで福州まで
便里次舟舟して送ると定法なりとて此使船は
船ハ乗組十人ありて使事長崎まで見らぬ舟一航
と此地より故小はた之港をわたりて舟一航
十九日午に福州の内厦つゝの澳の端より舟がはるは是

近行程五百里余厦門ハ故島島の地とゆふと此島あり
人家を新あり日本をいふ島前ともいふは佛之
島より清船すゝるとある日五月上旬厦門より東北の
方へ向て舟より三百里日來つらむと云ふ舟が船を
繋ぐ此舟を子三三といふ地勢東うけの灣洞ありて
双方の山は若く人家百軒程つゝあり皆漢をものごと
業とするさやなり唐土の海邊越く片灘ありて此
島の取もなり又破浪もなり此島も越く見ゆれば

彼國人等一箇島の名を教へず又磁石をも見せず
踏進き所は多き濁りたる海まで遠くは福州の海色
の混じたる所なるなり 五月下旬よりなりて予ニモウ也
三月十日ニシボウと云ふ所へ往く 換は予ニシボウなる所なり
是れ南洋波のことなり
所も三百里も有りしありし澳門にありしニボウと云
九百里と云ふも亦不廣き所なれど所幅も狭し
日本の方板のこゝに横横に堀を掘りて運送して自由
なりと見えたり則上陸して舟に乗りて是れと云ふ所より

十日むらりて送るは是れより右浦へ海と海に僅し
十日程なりしなりれども門舟にて送るは是れと云ふ所より
四月日寧波出るといふ所より舟に乗りて是れと云ふ所より
船今八人乗組ありし船に役人も乗しりて是れと云ふ所より
踏進き所は多き濁りたる海まで遠くは福州の海色
の混じたる所なるなり 五月下旬よりなりて予ニモウ也
三月十日ニシボウと云ふ所へ往く 換は予ニシボウなる所なり
是れ南洋波のことなり
所も三百里も有りしありし澳門にありしニボウと云
九百里と云ふも亦不廣き所なれど所幅も狭し
日本の方板のこゝに横横に堀を掘りて運送して自由
なりと見えたり則上陸して舟に乗りて是れと云ふ所より

帆をうけ風をりし時に海はうらりて川を流したるも
吾等も進みて見ゆふに好し一因共おん千ウといふ
所より行く いん千ウをきく 即ち松州なり 此所の取人語よりて二ボウ
此取人の心とあり 閏七月 卯年 閏七月 七月十三日 九日とて進めず
此所人取大坂おとも有と町の地の奇麗なり されども
市中往來の道はいつきも如お好しとせり 故に市店の時
極むとせり 一くハ見志 此所 舟ハ大坂後のくち板あり
たよりた右は画あり 爲せおはり
舟を渡りておよりるちかもの唐河
をよりてまゝくおり見入す 此所ときいん物人何ちかても

多し 因十日又川舟より送り 送らる事あり 因十浦
この内之よりおて改を更しれども 地名は取事能す
因十二日右浦より志すしんボウよりハ二百里もつらりと
その船よりより直しお好し 故に舟より送る人取は
則ちお好しよりよりて案内して一時むらり 浦居て取人
由來は中にも重役の人と見入しその中央にして
曲最にお好し 故に子の装束を志し 玉の飾りも是を
戴りたり 夫右より下取中人をよりお好して 是より通河

唐人出て漂流の始末年月下あつたを尋ね別其詳
を伝説す事終つて西河身ほひ時最のまとき
西連行りて地家よ奥羽の漂流又一人居り是も
其の十月は浪流され辛苦を嘗く漸此所へつり
とちん伊をを那中田村十吉ある者の船中へ仙卷
形その巻石後半仙の若人その所の若人山羽その上の若人南詔其
の若人細吉郎おと合せり九人となる是より同
れなりて日ぬへ海海事なれり今を正法くふひる

去つがら七々命を始め七人の若と形形の若く一雨り
来りらひいりむりり嬉しあらむ又吾財う事も心給
思ひ居り地不あての食事終り粥を晝ハ飯なり
こ番作の弟あるはむて下年之世果とらハ油阿け
是腐本ハ太刀奥大根の枝枝を若たれとせ食すれ地
里も遠く人衆一万余たりとれも日本の名産
に比ふれハ家居阿しき旅ちり旅人群集する事ハ
極て旅やう時うも院も多りけり店屋さぬくあの中も

日本のふくくと夢の店有り揚子江布をと環状又懸
痛ぢり其外紙紙傘漆木漆木漆木漆木漆木漆木の
紙紙を皆日本の物多く有り九月八日十時と斗らす由
若物来まり極子のつちと尋ねた二月中旬澳門へ志
まより船の海路を経て舟ふと子あよる今日
漸く此方よる中を述べ初を席におれて極列極此
艱難の船りしごと一人おれ極細ありしと有
ちれば各世事と加えしと女子極ひと別た浦ある

あつて百々日甚るあ日よ一なえ浴す又町月歩行
の長必後人付添て細細す故よら子孫よ又あすも
能りすお十月十日よ奥洞の若五人志物長以市
若を漸く重考又志と源流とつ子船よあせり出帆す
同女百々初を師若助治希々情由細述三三樹能光
以上四人を舟奉泰といふ船よあせて出帆す あまのいし浦
あて船あせり
右浦達海中以舟奉泰の舟海船並つ同船入一枚
若留す即ちあての場を此船より世路いし善い唐人

より船に重通河の中より介放則貫ひて文持帰たり
梅唐古の人は眼をきけ纜を解て在浦の湊を如
此船を但人数九十五人初を命あとも袖の方網を
をわに居て志不自由なりとなり湊を如てより
海をあとを見て名を尋ねるも舟の船同くも方たが
舟として有用として舟も散す磁石も一向に
船をせず是船は舟の方たなりなりと女は日帆
して回毎日舟をもちもりもつらめ海の小火と焚

をりて夫へも登るを如せし所り翌十月船留り
早の近くゆれり想して唐船渡来の名を語らる見
ゆらわむれハ鶴を教し酒をさうりて祝儀をおす
帰す。よも唐古の山をえんれハ回船は祝ひをお
すと此時ハ船中大に祝ひ喜ひて四人の老おも
たハ酒般を告ぐとゆり十二月廿日肥前長湊乃
湊よ海船に入はす如てはまた所の山文を如りて
揚舟へハ今思廻り日ハ保長船入候して彼人

の考も一雨より多かりたり。音目より三山は常形。雨の文跡
以て終て始の深遠より如由に記したる故に是等あり
則に再軍利加より唐土へわたり。漢口より寧波抗
州を経て南浦より唐船より安南南凌へ海より航
具より上り。踏海よりいふとも通より。長清の山築より信板を
以て可運佛の像と
湘上諸行よりものあり如由に記しより邦宗より
のしる事時よりい信板より信板を増すより後にも亦三徴仰より
海軍より海軍の間より終りハ。船ハ汁より香のお金に換
たの若虫付。晚ハ茶漬なり。折く如由人來りて終りゆも

何らいを急おし中より一。神奈郡とも細少へ一と
記し中より一。月より之を危陽に浴し。月代より
潤すす。狭よりともよみ。病より四月下旬より。中より
衣服の形をせし。六月八月より。冬。物より。第一筋
つを。下より。去。冬。志。船の。良。果。通。下。第。筋。手。扱
一ツ。傘。巾。結。を。結。く。よ。下。より。な。り。如。官。府。の。は。ま。あ。り
浴し。教。年。の。憂。苦。も。終。り。志。心。の。病。も。皆
以て。一。雨。中。に。得。る。父。母。の。形。も。人。も。病。も。い。つ。牛。娘。

あらんと樂しむ。居たりりり既今辰の年、後、まきと
夏、初、七月廿五日、西、あ、の、若、子、松、谷、の、内、の、方
う、と、知、ら、れ、る、も、は、後、人、迎、は、来、ら、れ、る、に、あ、る、故、初、め、那
ら、ふ、松、谷、ふ、一、所、も、居、る、よ、の、皆、ま、ま、の、人、と、ま、り、と
あ、と、あ、人、の、才、と、ま、り、な、り、て、ま、ま、の、年、の、初、め、に
と、の、内、の、あ、る、一、と、居、る、女、八、日、に、一、用、事、ま、り、あ、り、
た、り、時、の、州、よ、の、事、も、あ、り、一、也、と、作、り、ら、れ、八、月、の、日
市、の、後、ふ、あ、り、日、廿、日、故、郷、へ、帰、り、る、と、一、所、

什貨財

角利、昔、見、甚、の、辺、に、金、少、く、一、と、浪、多、く、一、と、ま、り、
連、ひ、牙、の、浪、の、磯、山、の、と、く、積、る、所、あ、り、浪、後、に、取、
丸、く、く、と、居、る、一、と、あ、り、一、と、の、抄、松、あり、化、か、り、
大、鏡、一、枚、四、目、七、丸、分、を、ま、り、十、六、枚、の、か、り、
日本、北、小、判、と、一、朱、と、の、あ、り、中、鈔、之、種、あり、大、鈔、の、
一、セ、ク、と、い、ひ、小、鈔、を、よ、り、ウ、と、い、ひ、中、鈔、の、カ、後、に、な、り、
當、り、と、の、枚、少、く、一、ヤ、ア、リ、と、い、ひ、日本、の、二、朱、の、あ、り、四、枚

有るものを下ウリヤアリスといふ日本の一歩のこと
 八枚有るもの銭クワトロリヤアリスといふ日本の二歩金の
 おろし六枚をラレイニリヤアリスといふ是も有る銭は
 細銭あり径五分をくりたき定あり一文字あり此
 銭四文をとりて小銀銭一枚に換ふ金の價ハ銀
 たり十六倍なり金銭重さ七文二歩のものは大銀
 銭十六枚に換ふ廣東より大銀銭一枚を賣れば
 銅銭を賣る二百文と有る

日本の判金を賣る大銀銭
八枚ありより一歩なり

大銀銭の類

大銀銭の類



一種のものを賣る
 概のりれも有り價
 ハ大銀と同一



七。や々
 リヤリス
 トー
 リヤリス
 一
 リヤリス
 リヤリス

舟舩

舟の熱をばりこもつケとも帆柱本の舟を
 パラシタと云ふ帆柱本は舟の帆柱より
 大船の帆柱よりカニテと云ふ本柱の大船の帆柱より
 舟の帆の熱を大まうして熱の網を包む上は
 油塗してぬくまを塗す帆柱の熱を
 端の出来ぬ帆の熱を帆柱の熱を
 救ふ一帆柱の熱を帆柱の熱を
 七角帆帆柱



是初古郎クサト
 江戸運使船
 大船
 塔離形をりては
 是るなり

ベリガニテ

双橋船

一 船より十のちをもちて、おとあり船ちるさう出
帆積りせしきまはる帆ちありき、初め風を供ひ
れとくそ子の方より風吹てもまゝの見え向ひは先
らうありけり風の順逆ふれは次第書後とも舟の
進すすむさふたを形洋中うありて教十日山をさ
まも包く、新州の谷楸ありて天の波なみねを
海路の甲種河知りて晴雨風候をいひそ切ん
と船をさふし期を刻りて必到り渡りて渡る。

おと無なし舟中此節令嚴明くそふも舟路
の指揮を背け船に志大なるは舵の幅ハ解り度
か、は是れ船動くすふも車の仕りありき、その力
を用ひて能く自由の、船の汁盤を始りて
船の款例を紙おき、碇をまき、口口論をうて道を通り
我われ悉す亦またしつゝまはるて、精巧ありき、いかに本意
四百里五百里の海を、舟は小川を渡らむと
思ひなり大洋をえ風波何ちと烈しくてもおても憂ひ。

此とあられども唯礁に觸り少く代畏るる所地方遠く
尋る時ハ先針路を信しむる大洋中少暗礁有る
處ハ先を揃し能く是故去り領め侮むを去る
其難るるは周察有る中ハ洞窟をくわく唐
音本此舟を去は是ハ比去まは微し小兎の哉まの
おとーとかや

一 火船といふものあり去り早し能く全体を狭
くし作り舟の支柱は鉄の大なる車あり舟中機関あり

大に火を焚く湯を沸騰し其船をくわく能く舟の
車は初一舟を櫂きそ舟は進歩しむ風は
帆をあげ逆風は帆を下げしむ走る疾きものと云
のふと一舟は時無糧或運送し又緊急の船報
およば必此舟は用由といふ是ハマメリカマメリ
見ると去り一廣東の澳門かたりキリスの大船一艘
あり一船ありと云

草木

樹木は、河内にも著る事なき土地也。尋常は

のひまゝ、木を花稀なりたあ、三四尋ばかり木もあまも

四五尺以上の木より曲りたるものありカリソと

いひ、唐葎の末と記すの志多し。穂本をいふあり

束は、志多し、これとも志多しある、極小なり、特なるも

ある、あまあり

坤輿記説、アライルといふ、穂本の志多し、南アメリ
カ、地の多し、産する所あり、即ち、阿波アライルと
名づく、とみ、特なる、徹する、子、五、二、年、ホルト、ガル、王、アル、ハ、レ、ス、カ、ゴ、フ
イ、ト、者、此、地、を、却、奪、し、其、好、教、も、ソ、地、名、と、以、て、地、中、穂、本、多、し、生、長、即、穂、本、枝

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

名つけ多クナクシテホウと云ふてハシラシテ流用ハせられ
 南アメリカの地ニ糖木多ク生ラレテハ叙ラセテあり

一果熟スルニシテ其の教種ハ色ビタヤト云ハレテ樹全
 体霸王樹ト云フクモ其ノ葉ハ又汁刺多クシテ大アリ
 花淡紫ニシテ其ノ實ハ生テ熟スレバ自ら
 裂ケ中ハ赤クシテ西瓜の内ノごとク黒胡麻散振
 かけたる如クシテ多クハ味ハ甘ク是れ其ノ味
 竿ノ先ニ針を以テ其ノ葉ハ板状ニシテ其ノ實を以
 テ突クシテ其ノ刺多クシテ其ノ葉ハ板状ニシテ其ノ實を以
 テ突クシテ其ノ刺多クシテ其ノ葉ハ板状ニシテ其ノ實を以

テ突クシテ其ノ刺多クシテ其ノ葉ハ板状ニシテ其ノ實を以
 テ突クシテ其ノ刺多クシテ其ノ葉ハ板状ニシテ其ノ實を以

ヒタヤ



どろの實

ちさめのき

既よりりのち
下より刺を叩き
ぬの肉を食ふ



どろの實を食ふ道具の器



そはぬま
つくば

イゴ

あま細き実りし
村依り実の少きもの
のこころも味も甘く
実のものも味は甘
是れ乾せば味も柿の
ごとし



葉の根の太き枝
葉の依り実の烏栖極の葉實より
か一方きし熟すれば自ら飽く
こけり赤味を佳しとれも深山ありとの故に食すべし

シリボイラ

金柑のこころをとりて煮る

身は皮をとり推搦せよ

熟し多量に食す

多量に食す

味は甘



一 リモシといふハ酸橘に似たり少くも味は酸

是を取て肉の内を去り皮を煮て梨に似たり砂糖

不浸茹さ食後あとも食ふあり

一 グロヤホといふは皮の質梨子に似たり味は酸

きと二種あり皮も種も食すも食はれ熟せば

肉ハ心堅く味は食す味微く甘れとも少

臭気あるあり慣るるその食すも能く食す

ともその味を知り時ハ佳く味佳あり

一 深山より一種の木あり其皮を剥ぎて樹葉を
忌棕櫚に似る毛有り直立して一文^大を有る
土人より多量に採りて以て木皮を子切削して
一尺程の寸切りに切りて穴を掘りて掘り枯木皮
ありの新く穴の中より大^火火久しく焚き土を
掘りて新皮を採りて出さるる此の木の皮を
食す者其木の枝葉を切りて土を覆ひて是を
二三日経て海に投じたり持て食す樹葉を

とて焼けて熱くして膜^{モロ}の中に入れて煮れば自然に解くと
味甘く香りと客^客のこころを解す所なり 渣滓^{カス}あり
とも幹を食し解くと口中に少しも渣滓残らず
一 アルゴドンの木^{即ち木綿あり} 高さを丈斗より高く
其葉日本に比し木綿より大なり 四つにさけて
綿を吐く^綿 加ふる^綿 糸を形し 線に引けり細くして
光澤あり 木綿布を織るを 想ふに綿^綿あり

常一の馬はカリチといふあり一種のりあつて耳
 かり長きもの故にチヨといふ名驛馬を又プロといふ
 唐古もその驢をといふものゝと一耳だけて長
 一駱駝もありカメイヨといふ先年日本をへ飯
 観るにカを少くもかりしは羊々といふありたの
 羊をチボといふありおむく毛の綿のあつて和のあら
 成ボレゴといふむく毛を先にもかり毛のあき故
 カプロンといふ

一土人の戦ハモニテガトといふよあモニテハ山をト
山猪山中に住む形も方々も猫も甲来半人
 やのふ来りし人の白鼻を畫はそ人勿心と取すと
 いふ世とのあむる時ハ鼻香芬といふ其
 あらうは満つ人志は成畏る
 一鹿のちるはる勲ありゆの毛換振より鹿の形
 こまき鹿鹿も似たり怒る時ハ太千尾尾成ふをこまき
 鹿鹿之尾をアリテイマといふ

アリゲーター

大きな尾

——



一 魚は蛇とかまの登風蚊もあつた
舟子かまの登風蚊もあつた

一 魚は蛇とかまの登風蚊もあつた
舟子かまの登風蚊もあつた
とつて海鰐哉バインとつて鯨
沖鰐鯨の形も見てもあつた
らる日本魚の魚もあつた

袴飾

男子の衣袴は長袴、小袴、西洋人よりくる袴などあり
 形はカミヤと云ふ襦袢（紅）体（紅）のふとよきものなり西洋布或は
 麻よりしるふと云ふ襦袢より着其の上より千ヤと云ふ袖より
 の中より横の結成減りて笠の毛成減りては袴連の裾あり
 ものや襦袢は横柄あるもの或は紋襦袢よりなる者極言
 を着其の千ヤヤケを以て其の襦袢見る是ハ其の
 羅紗より製せり袴打よりしるふと云ふ麻本袴等あり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

出さるゝカリウセエヤと云ふ共上は羅紗を著らるゝ
 公タロシと云ふ故をく有り衣被上下とも上連と云ふん
 毎まゝに似てむさむと云ふ。此の羅紗を極く厚
 帽を以てせりカキヤと云ふ。顔の所をさかり日影
 有るヨロシロと云ふ。周圍は日影をひきおきかきし
 のかきしをせり。大抵は剣を佩る者なり。おかし
 安の人の佩たるは銅製。皮の鞘を以て此の
 磨く光あれども柄が切ることあるなり。たゞ突

くるみ紋をきとす。極みあり

一女の上着は、袴帯。或は花布の褌。き紋用ゆあり。縫
 つめり。袖のあり。或は緩く縫を後へ合せかけとむる
 あり。縫より大い。女家の褌衣のく。襦袢あり。裾ひろら
 甲ふ。短きり。下着は木綿。き。袴。後々。縫つめり。
 首をきり。はむ。穴あり。縫より。上々。裳を著。褌を引
 下。ハ。云。重。有り。是。を。カ。ニ。ワ。シ。ト。云。ふ。は。下。は。褌。衣。の
 出さるゝ。褌。は。は。云。ふ。は。の。紋。ナ。シ。ク。ワ。と。云。ふ。

一 女の尻ふかき風呂敷の如きもの織入レボウリと子幅
に尺廿八寸をうけりわし^出ゆき時ハ必^出取^出る^出おき
わし^出ゆき^出左^出右^出に^出遠^出之^出顔^出身^出別^出し^出あ^出り^出肉^出中^出
唇^出の^出肩^出より^出脊^出中^出へ^出かけ^出て^出飛^出る^出る^出鶴^出も^出あ^出り^出
あ^出る^出は^出形^出の^出西洋^出布^出を^出う^出り^出た^出り^出

一 足ハ下^出は^出莫^出大^出少^出の^出縫^出を^出あ^出り^出織^出を^出あ^出り^出上^出の^出皮^出
の^出度^出を^出う^出り^出冬^出の^出牛^出皮^出を^出三^出枚^出を^出ひ^出り^出て^出厚^出く^出
あ^出り^出は^出莫^出大^出少^出の^出皮^出の^出枚^出を^出あ^出り^出上^出の^出皮^出

綿^出を^出う^出り^出たる^出皮^出を^出形^出梨^出

一 男子ハ^出髪^出を^出前^出へ^出た^出道^出眼^出の^出辺^出に^出う^出り^出切^出り^出梅^出柳^出ハ
髪^出を^出危^出を^出う^出り^出年^出際^出を^出切^出り^出後^出ハ^出頃^出へ^出梅^出柳^出ハ
梅^出柳^出を^出う^出り^出口^出髪^出を^出髪^出を^出う^出り^出長^出く^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出
この^出も^出あ^出り^出人^出々^出と^出い^出ひ^出の^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出
今^出髪^出ハ^出額^出の^出真^出中^出より^出あ^出り^出う^出り^出後^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出
梅^出柳^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出
四^出指^出の^出あ^出り^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出髪^出を^出う^出り^出

耳のあつりの髪を切られたる耳のたまきし飾りといふ
 簪或は尺と形一揃はあまべいふとふ男如きも
 指の口或は入きく飾といふ

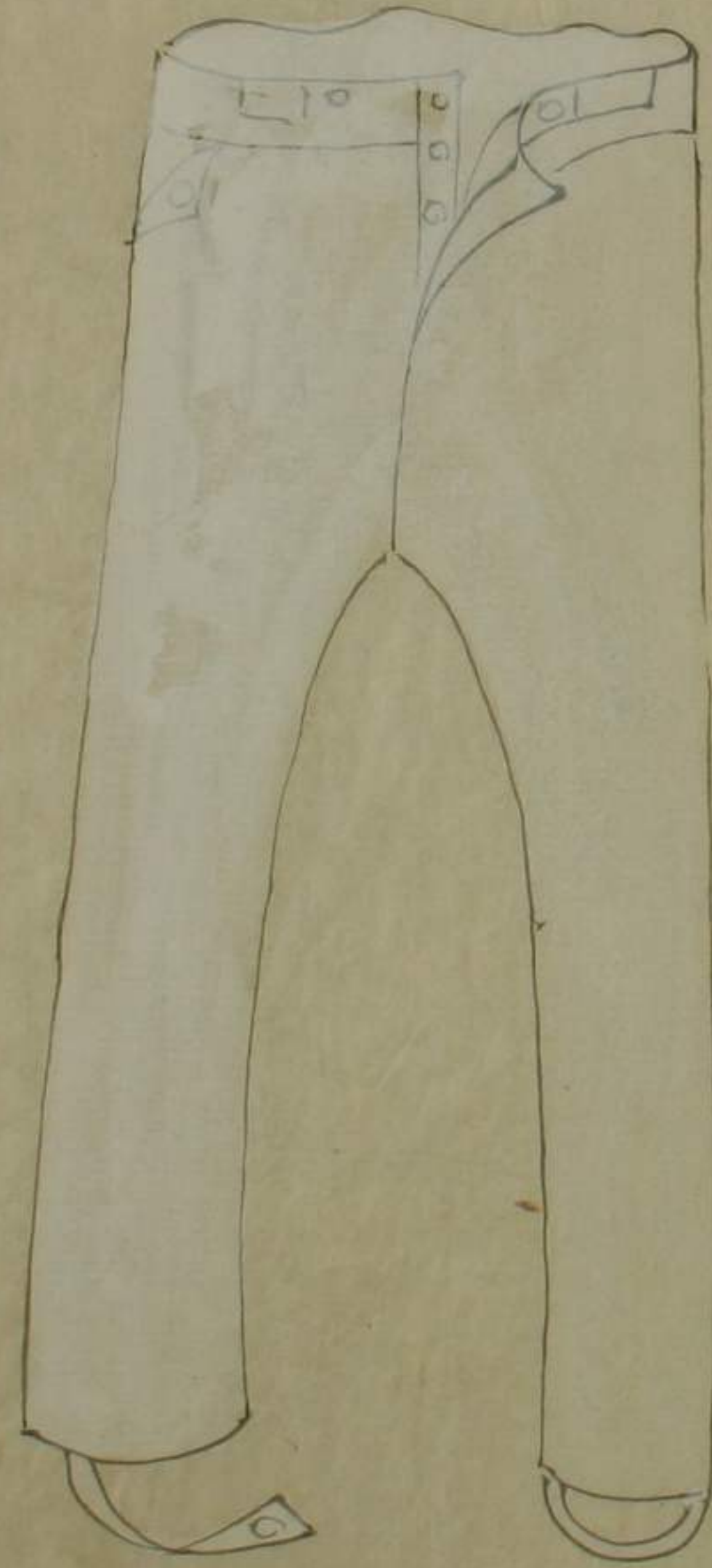
一浦巻ハ西洋布或は廣く縫ひ合せ敷ふ木綿を乳
 とつ糸を並ニウチ折る毎羊毛の和らぬる或は綿と一
 ニウチ折る中押込くは乳を捲りお折込くは乳を
 くるまに乳を少く入せ捲りくは後飾を縫ひきり板子乳のあつ
 低く有り飾の所より建あつる意あつるものあり

男子後脚
 比図

カミシヤ 前
 男の袴絆
 あり
 白き西洋
 布を捲く
 紐のけし
 初めは名
 切りあり



前

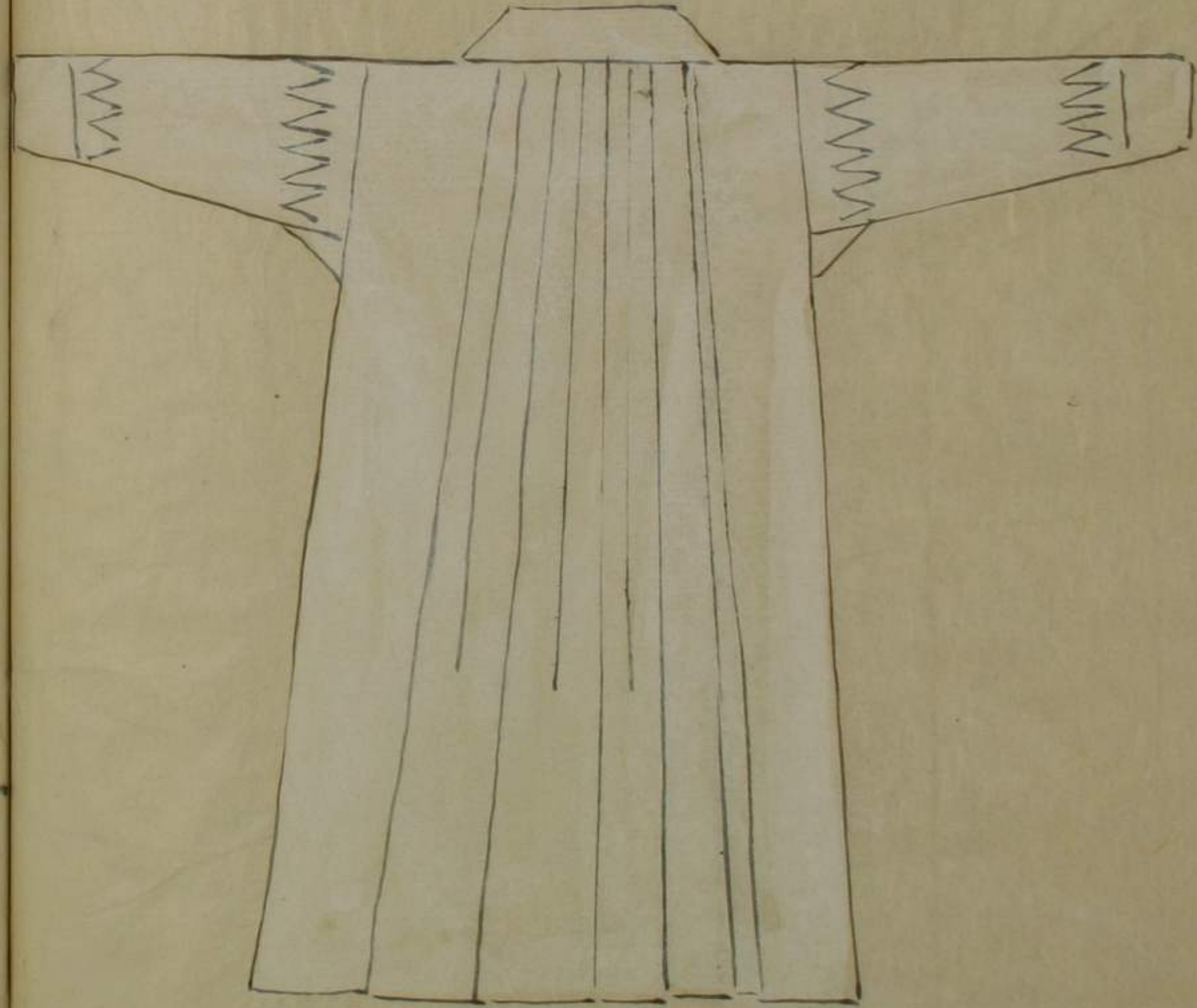


ハニタロシ

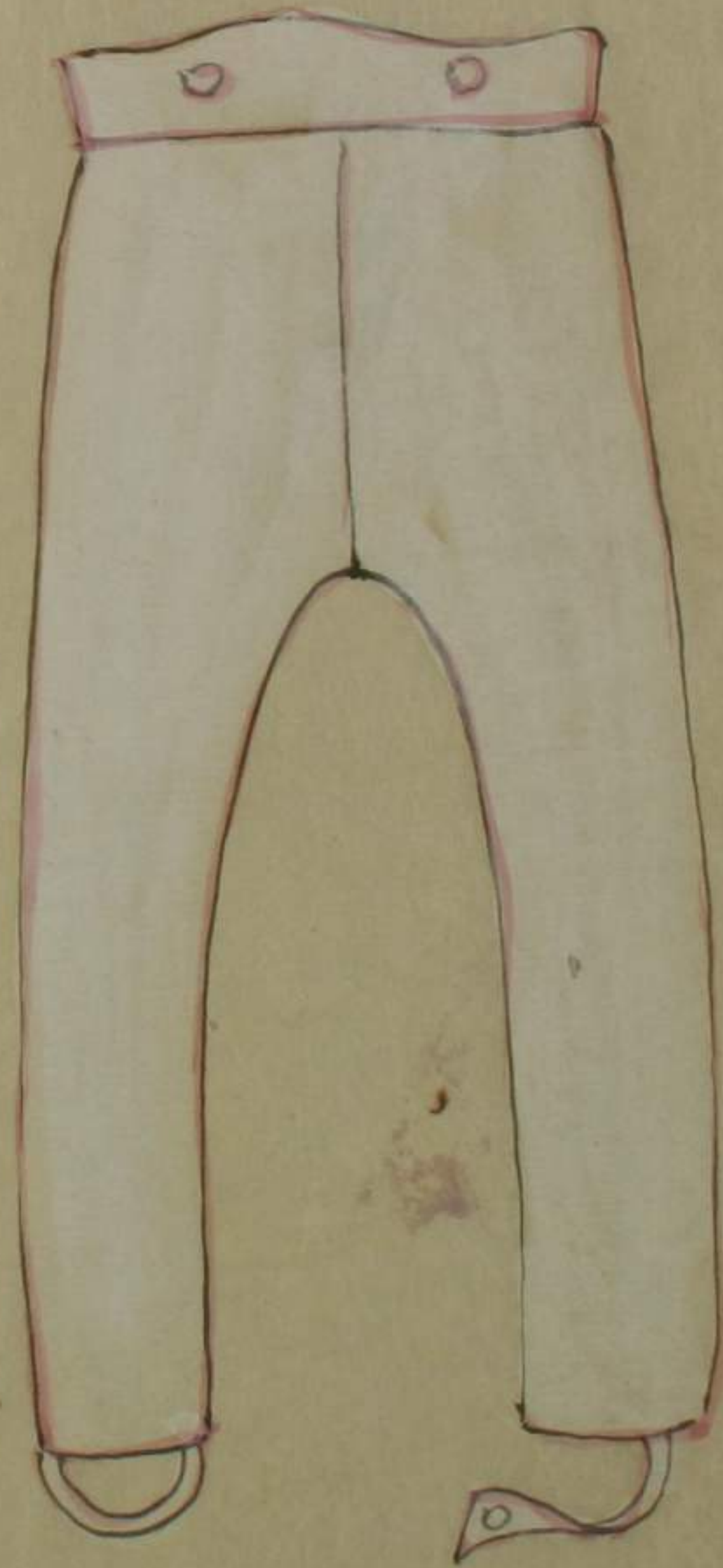
襷^{タビ}有り糸子織のその又々
羅紗^{ワサ}あり糸子織のその又々

周

能

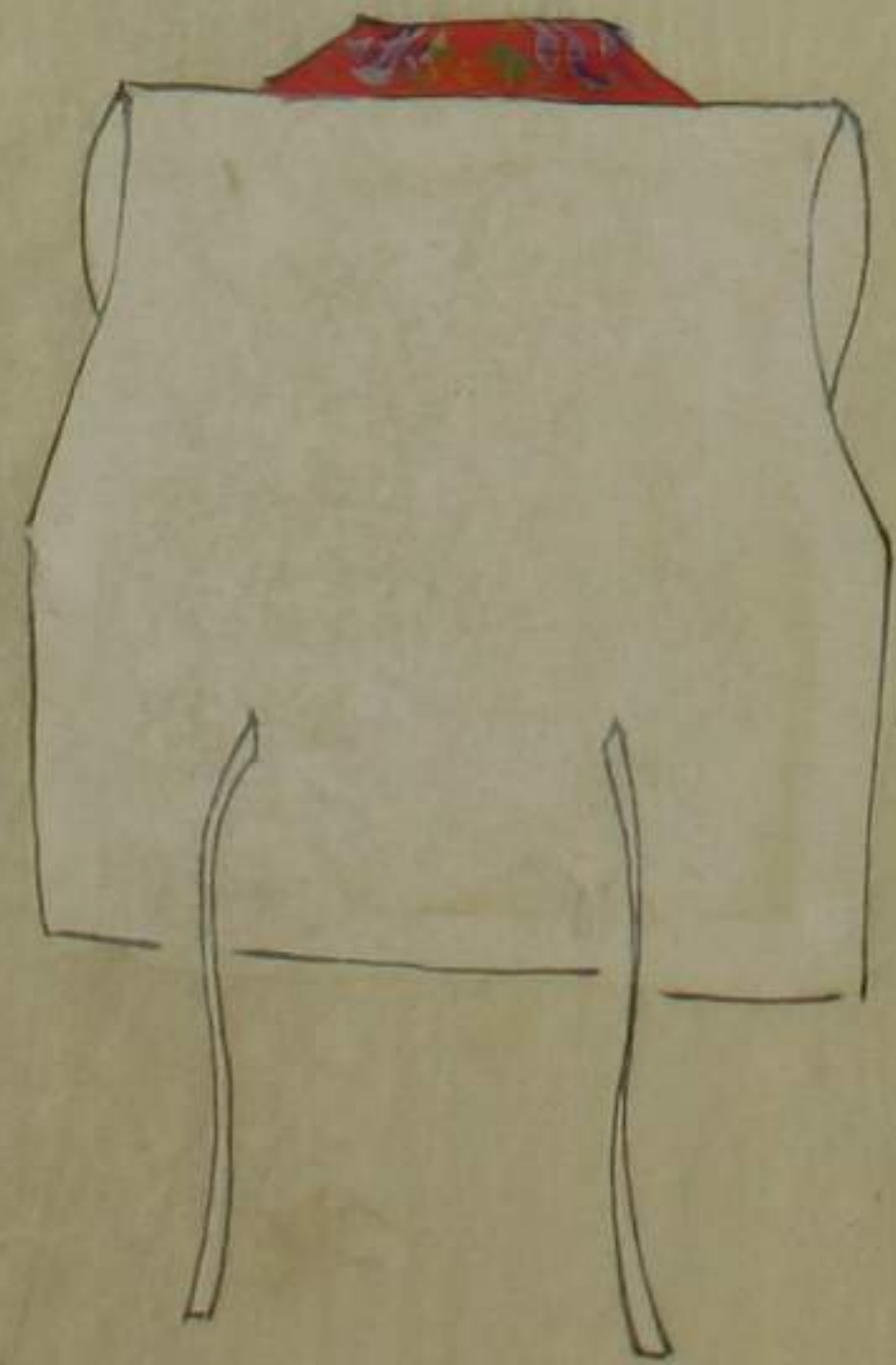


同後



千ヤレコ前

同前



神前ナカキの裏衣ウラキを羽毛ウロク綴ヅミの
おと記オトギそのふ番フきお振フリある
との又または花假ハナカサ等ナドを製ツクる

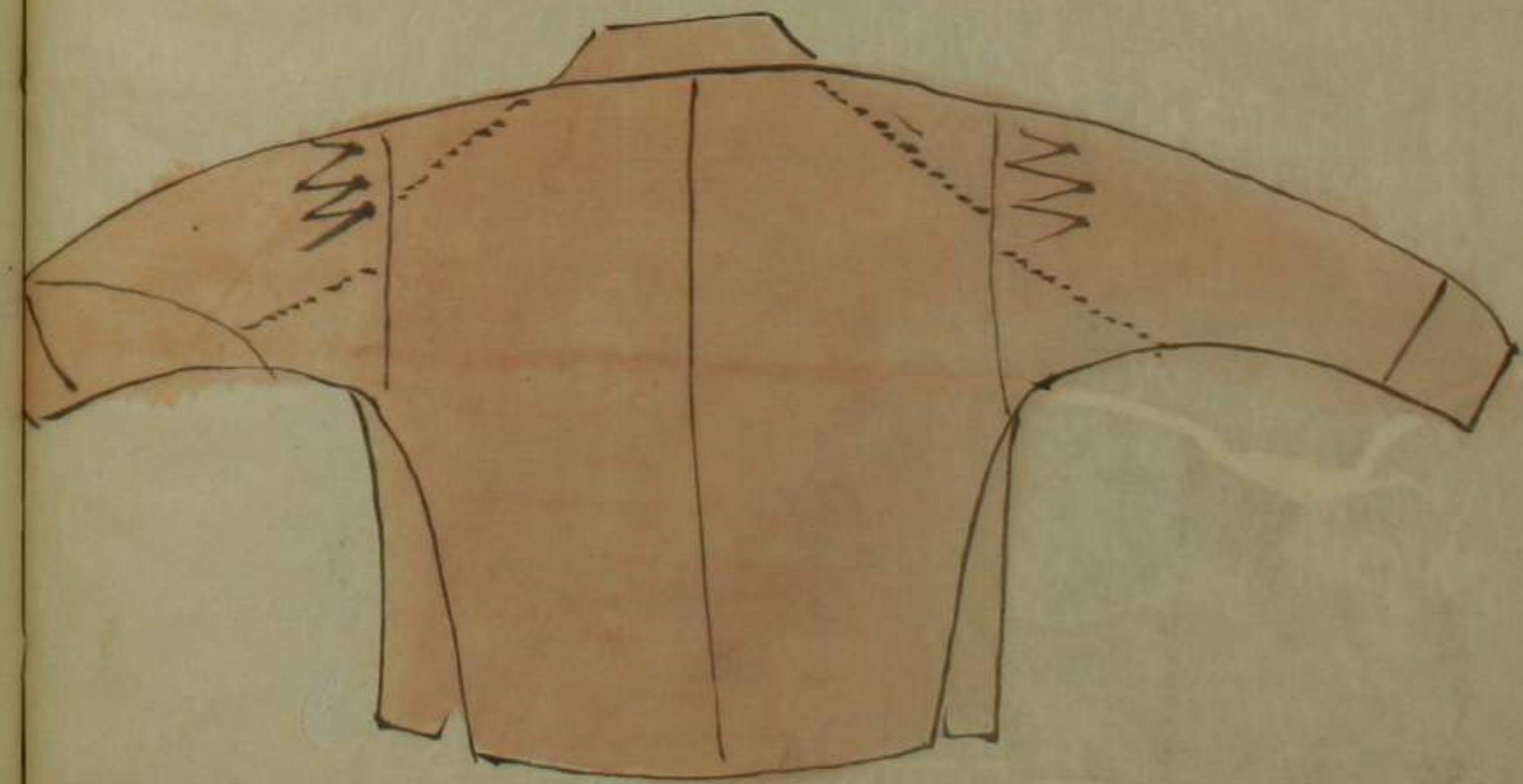
千ヤケ夕前

表衣あり
多くは大
泥まき製

同背



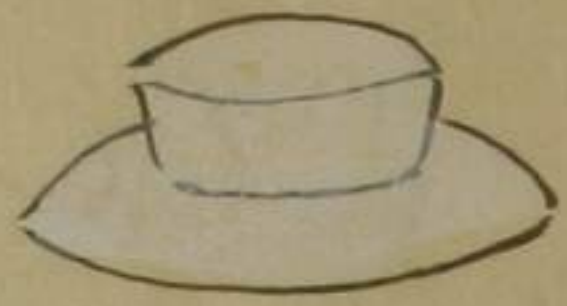
鏡
鏡
鏡
鏡



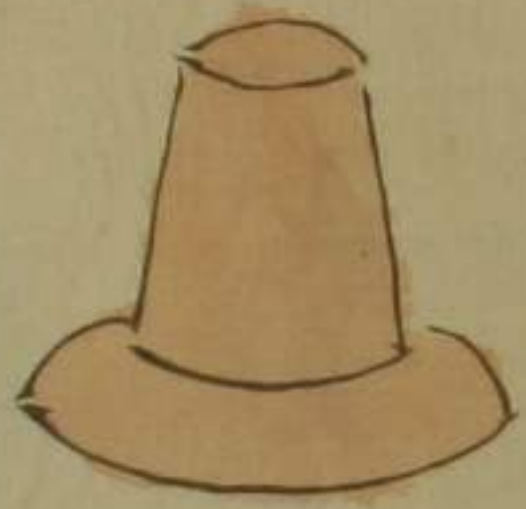
同
褲



帽
ロレブロ



種々の形あり



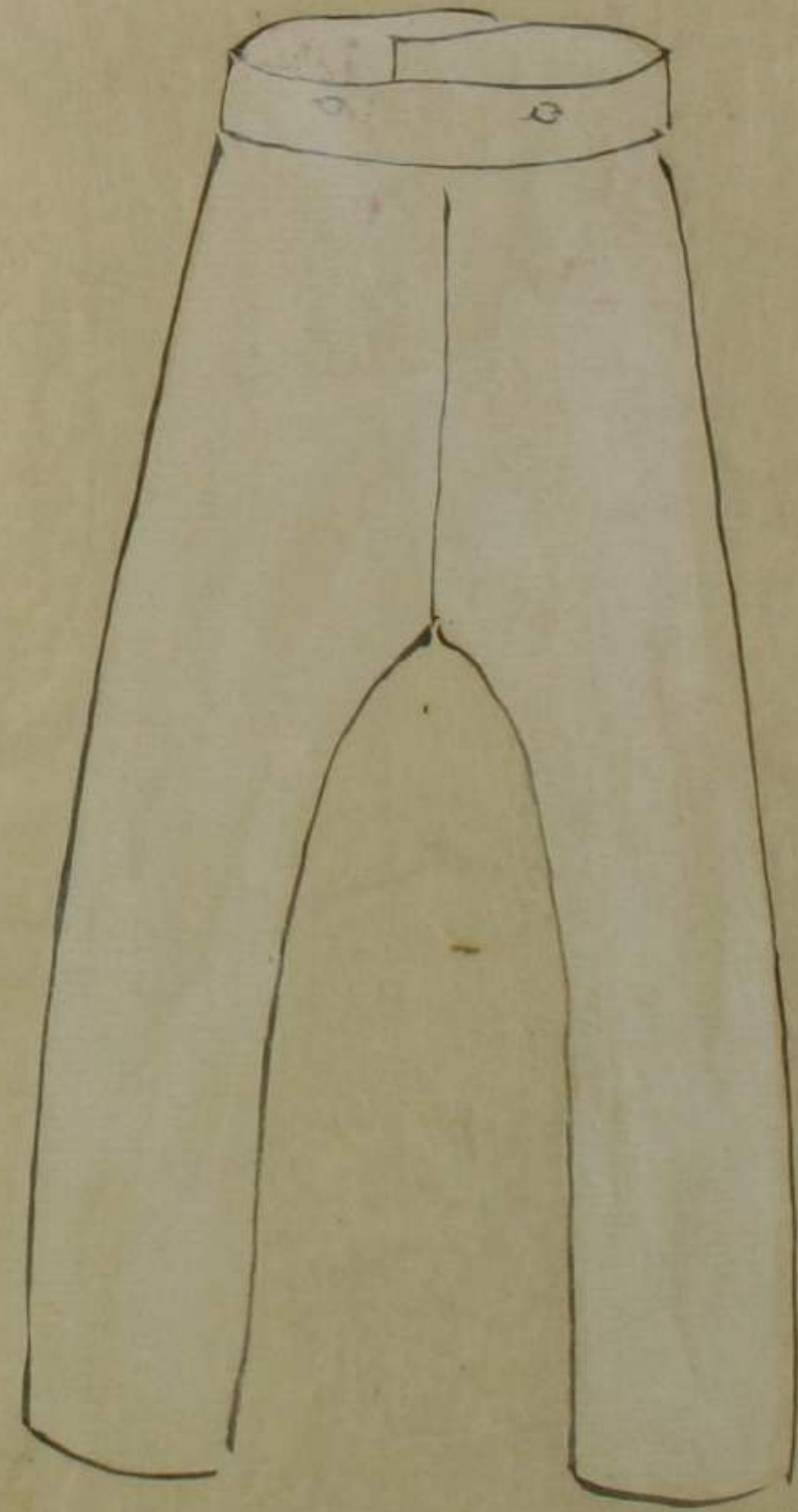
此形のものは

テツモウキ
鏡座なるもの

多岐あり



後



サバト

シタウツ
襦靴 草履かき履る



靴



同底



履 同底



ソレも表は羊皮を製 鹿ハ牛皮の
三枚重なる

婦人袴飾の圖

カミソシ



女の襦 着より西より本綿を履る
前後より終つて女子一音をきし
あむ穴あり 襦より上六
単より 襦より下は之を履る

紡糸のひびの形の西洋布をさつ



女の内ふかきものへ幅は八長き合なり

又レボーツ

ナレグワ



襪徒^ハあな

女の腰子^ハ何^ハものなる^ハ出^ハる^ハの^ハ襪徒^ハは^ハさく

女の表衣

前



おの縫つめ
おの背より
合せかけしむ
おの利

縮糸成ハ着しと花布
と用也

胸の形
おの背より
おの肩の
おの袖の

背



縮糸
色々の花
の形を
組まて着の取付の
とこ返成括る山と圓のり

おの付
かおる
おの
おの

リウボシ又



一種圖の
しつゝ四角
なるものなり

女の小襪



女の履
上り赤身
下り白身
板履なり

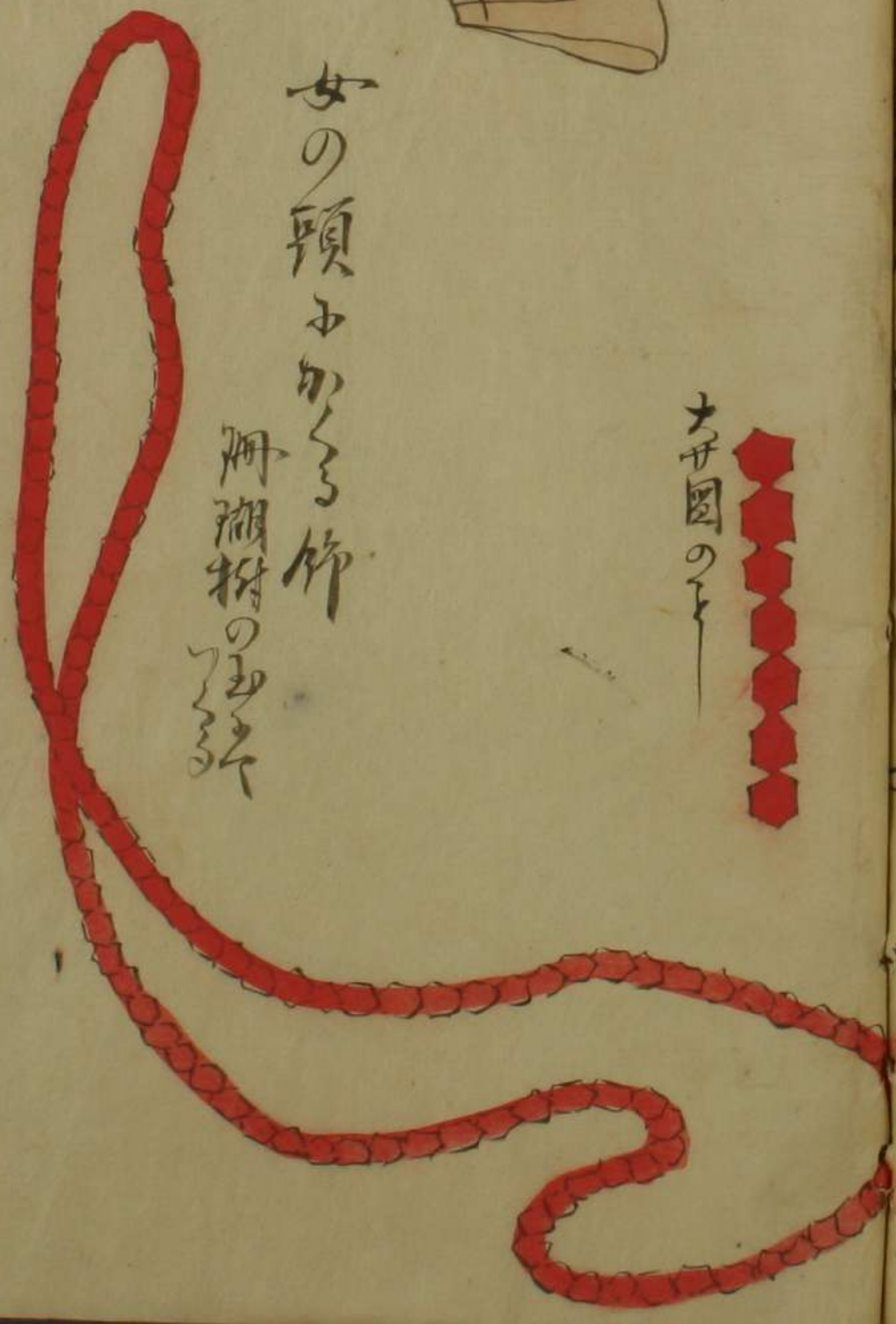
ベイ子
櫛多り



大サ圖のト


女の頸かけの飾

珊瑚樹の玉



女の耳かけの飾



